
GUILD -還るべき場所-

harukana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GUILD 一還るべき場所一

【Nコード】

N9032X

【作者名】

harukana

【あらすじ】

戦争が終結して20年。平和とはいえないが、世界はとりあえずの平穏を取り戻していた。多くの人々は自分の生活を成り立たせるため、自給自足の日々を続けていた。そんな中、志を同じくした人々は一つの場所に集い、共同体として活動するようになる。後にこれはギルド（GUILD）と呼ばれ、世界各国に大小様々なギルドが生まれた。これは、そんな星の数ほどあるギルドの中の1つ、【雨宿り】と呼ばれる小さなギルドと、そこに暮らす人々の物語。

プロローグ 路地裏の出会い

煤けた臭いがする。空気はわずかに湿り気を帯びていて、暑さとは別の肌にじつとりとまとわりつくような汗が滲むようだ。

路地裏特有の空気の中、溶け込むようにしていくつかの人影が揺れる。

「ったく、手間かけさせやがって。クソガキが……」

苛立ちを見せながら一人の男が言った。

「まあいいじゃねえか。これでまたしばらく金には困んねえんだからよ」

もう一人の男がニヤニヤと笑いながら、足元へと視線を落とす。そこには、気を失って倒れた少女がいた。歳は十代の半ばくらいだろうか、これといって目立つような外見の特徴はない。

倒れた少女は完全に気を失っていた。

その頬には真新しい赤く染まった跡があり、それだけでこの場で何が起こったのかを理解するのは十分だった。

——人売り

数年ほど前から急激に件数が増えてきた事件だ。標的となるのは主に女子供で、中でも幼い少女は裏取引の市場で高く売買されているらしい。

標的とされるのはもっぱら、身寄りのない孤児や親を失った子供達だ。そういった標的に目をつけ、こうして人目につかずさらい、闇市場に流す連中がいる。この二人の男達もまさにそれだ。

「さてと。そんじゃ、足がつく前にとっとと運んじまうか」

片方の男は足元に倒れた少女の襟首を強引に掴み、担ぎ上げた。それはもう少女のことを同じ人としてではなく、ただの商品として

しか見ていないぞんざいすぎる扱いだった。例えるなら、ゴミの詰まった布袋を面倒臭そうに持ち上げるかのような。

「行くぞ。今夜は港でパーティーが開かれるはずだからな。こいつにはそこで、しっかり稼いでもらわねえとな」

二人分の濁った笑い声が、人気のない路地裏のそのまた奥へと遠ざかる。まだ昼間だというのに、その先に続く道は黒一色に染まっていた。それはまるで、気を失った少女の行く末を暗示しているような闇だった。

飲み込まれていく。自らの意志とは関係なく。そんな結末を望んだわけでもないのに。引きずり込まれていく。

……はずだった。

「が……っ!？」

少女を担ぎ上げていた男が、突然前のめりに倒れ込んだ。肩の荷だった少女も、男と同じように地面へと倒れていく。

「な、何だ!？ 何だってんだ!？」

もう片方の男が慌てた様子で辺りを見回す。するとそこには、拳大くらいの大きさの石が転がっていた。どうやらこれが後頭部に直撃し、男は倒れてしまったらしい。が、重要なのはそこではない。

「ふざけた真似しやがって! どいつだ、出てきやがれ!」

路地裏の奥で男は声を荒げる。薄暗い路地の向こう、日の当たる方で何かが動く気配が確かにあった。それは

「――何してやがるはこっちのセリフだ。ふざけやがって」

「な……」

男はわずかに言葉を失った。その声の鋭さに対して……ではない。「顔も悪けりゃ頭も悪い。頭が悪けりゃ品性も腐るってわけか。お似合いといえはお似合いだが、少しばかり道を踏み外し過ぎなんじやねえの、オッサン?」

「こ、の……っ！」

男の怒りがあらわになる。しかしそれも無理のない話だ。目の前に現れたのは、そこで気を失って倒れている少女といくつも変わらないであろう外見の……

「ふざけやがって、クソガキがっ！」

——まだ幼さを残す、少年だったのだから。

「とんでもねえことしてくれやがって。覚悟はできてんだろぅなあ！？」

「うるせえよ」

怒声とも罵声とも取れる男の声に、しかし少年はうんざりとした様子で一言だけ返す。

「自分のやったことは棚に上げて、人にどうこう言える立場かよオッサン。どっちがとんでもねえことしてるかなんて、説明しなくたって分かってんだろ？」

少年は抑揚のない声で淡々と続けていた。淡々としたその言葉の中には、しかし確かな苛立ちと怒りの感情が織り交ざっていた。隠そうとする必要なんてない。少年はただ、純粹に怒っていた。目の前の理不尽に対して。その理不尽が平然と繰り返される世界に対して。そして何より、こんな理不尽が日常の中で当たり前のように繰り返されていることに、今になってようやく気づかされた自分自身に対して。

「ガキが、ゴチャゴチャと……！」

男は腰に手を回すと、そこから薄暗い路地裏の中でも目立つくらいに銀色に光るナイフを取り出す。それを逆手に持ち、こめかみに青筋でも浮き上がりそうなほどに力を込めて強く握り、感情の赴くままに少年へと突進する。

「くたばれやあああっ！」

路地裏は狭い。左右に動ける距離なんてたかが知れているし、障害物になりそうなものも直線状の距離には見当たらない。男がこのまま突っ走れば、その手の中のナイフは確実に少年の体のどこかしらを貫くだろう。どこに突き刺さるにしても、まともな結末が用意されているはずがない。

そんなことは少年も百も承知だった。だから、次の行動も非常にシンプルなものだった。

少年はただ、足元の砂を勢いよく前方に蹴りつけた。積もりに積もった埃や砂利、小石がまとめて宙を舞う。そしてそれらは、バカみたいに突進してくる男の視界を遮るには十分なものだった。

「ぐあっ!？」

顔の正面から砂やら何やらをかぶり、男の足が止まった。ナイフを握っていない方の手で目元をこするが、そんな拳動をいちいち黙って眺めているほど目の前の少年の気は長くなかった。

ガズン、と。真正正銘の徒手空拳、ただの一発のゲンコツが男の鼻っ柱をへし折るようにして直撃した。真正面からぶん殴られた男は、だらしなく鼻血を噴出しながら灰色の路地裏へと倒れていく。

「そのまま少し眠ってろ」

すでに気を失っている男には聞こえていないが、少年は握った拳を崩さないまままで吐き捨てる。

「ふざけやがって。他人の人生を何だと思ってやがる。土足で踏み込まれた拳句、いらない結末まで用意されたんじゃないや。たまったもんじゃない」

それだけ言うと、少年は横たわる男には一瞥もせずに路地裏の奥へ進んでいく。先ほど石をぶつけて倒れた男も続けて無視し、その先に倒れるもう一人の下へと歩み寄る。

そこには、一人の少女が倒れている。これといって目立つ特徴のない、どこにでもいそうな同年代の女の子だ。

「よ、っと……」

その見た目よりもさらに軽い体を静かに背負うと、微かな呼吸だけを確認して一人呟く。

「待ってるよ。すぐに連れ出してやる」

聞こえないと知りつつ、少年は続けた。

「……お前みたいなヤツに、こんな日の当たらない場所は似合わないよ」

プロローグ 路地裏の出会い（後書き）

まずは本作をご覧いただき、ありがとうございます。

ファンタジー小説ということで、本作GUILDは連載を始めさせていただくことになりました。

このお話はおそらく、特別な何かにはならないと思います。

どこかで見たような物語に近づいていくと思います。

それでもひとまずは、自分なりに完結を目指してがんばっていきましょうと思っています。

こんな物語ですが、よろしかったらお付き合いください。

そして願わくば、どうか最後の瞬間を見届けてくれる読者の方が一人でも多くいますように。

手短ですが、これで挨拶とさせていただきます。

第一話 帰り道

「……………」

ゆっくりと視界が開けていく。ぼやけた瞼をゆっくりとこすると同時に、体のあちこちに鈍い痛みが走るのが分かった。

「っ、痛……」

開けた視界が再び閉ざされる。痛みが引いていくの感じながら、少女はもう一度ゆっくりと目を開けた。そこは

「……………ここ、どこ？」

まるで見覚えのない景色だった。屋内で、どこかの一室であることはすぐに分かった。部屋の中はきれいに整頓されていて、自分が寝かされているベッドの他にもう一つ同じ大きさのベッドがあり、その間には机が置かれていた。

木目調の壁と床と天井。一ヶ所だけある窓はわずかに開いていて、その向こうからは真昼の日差しと仄かに甘い香りを含んだ春の風が流れ込んできていた。

「……………」

少女は一通り部屋の中を見渡すと、ゆっくりとベッドから降りて二本の足で立つ。体のあちこちに痛みが残ってはいるが、歩けないほどではない。

開きかけの窓に近づいて、ガラス越しに映る自分の顔を見て気が付く。左の頬にガーゼが張られていた。触れてみると、そこにはもうほとんど痛みはなかった。が、それで少女は思い出した。あの、路地裏の奥で自分の身に降りかかった白昼夢を。

「っ……………！」

思い出し、足が竦んだ。忘れていた恐怖がよみがえるように、嫌な汗が一筋、背中を伝って落ちていくのが手に取るように分かる。少女はそれを振り払うように一度、ぶんぶんと頭を左右に振って気

持ちを切り替えようとする。そして恐る恐る、目の前の窓を大きく開け放って……。

「……………あ」

途端に安堵した。そこから見える景色は見慣れない世界のものではなく、何年も時を過ごした馴染みある景色だったからだ。そんな少女の安堵を後押しするように、暖かな春の風が頬を撫でた。

「……いい風」

思わず少女が口に出してそう呟くのと、部屋のドアノブが外側から開かれたのはほぼ同時だった。

「あら、気が付いた？」

反射的に身構え、少女は声のしたドアの方を振り返る。そこにいたのは、少女よりも一回り背丈の大きい女性だった。とはいっても、平均的な身長よりもやや背丈の小さい少女から見ての一回り大きいだ。

単純な身長だけ見れば、平均と同じかそれよりもやや小さいくらいである。

女性は少女よりも大人びており、どことなく大人な雰囲気がかもし出しているようにも見える。髪の色は明るめの茶色で、ちょうど肩の位置で切り揃えられたように長さがまとまっている。

「体は大丈夫？ どこか、痛むところはない？」

「あ、いえ……」

女性の問いに少女はわずかに戸惑う。顔も名前も知らない人なのだから無理もないのだが、それでも目の前の女性が自分に危害を加えるような人ではないということは、その雰囲気で何となく分かっていた。

「あの、私……どうして、ここに……？」

「ああ、大丈夫よ、安心して。そうね……事情の説明は、私よりも本人に聞いた方が」

「————何を考えているんだ、お前は!!!!」

早いかもしれないわねと続けるよりも早く、下の階からそんな怒鳴り声が響いた。

「え……と、今のは……?」

おそろおそろ、少女は目の前の女性に訊ねる。対して、女性は苦笑いを隠し切れず

「……まあ、百聞より一見、かなあ……?」

「?」

小さく溜め息を吐いて、女性は頭を抱えた。

少女と女性が階段を下りてくると、そこは一種の戦場だった。

「何度も言い聞かせてきただろう。単独で、しかも手配中の犯罪者に手を出すなんて、何を考えているんだ!」

「だから、何度も言ってるだろ! そいつらを捕まえるために」

「そういう話をしているんじゃない! 今回はたまたまお前も彼女も無事で済んだからよかったものの、一歩間違えれば大怪我じゃ済まない話になっていたかもしれないんだぞ!」

「っ、いいじゃねえか、こうして大丈夫だったんだから! それに、俺だって騎士の端くれだ! 手配中の犯罪者をみすみす見逃すなんて、そんなバカな真似できるかってんだ!」

「見習いになったばかりだろう! そういうセリフは一人前になってから言うもんだ!」

「見習いだからってバカにすんな! 大体、アクセルは慎重すぎるんだよ! そんなんでよく騎士を名乗れるな!」

「偉そうな口を利くんじゃない! いいかキリヤ。お前のした行動は、お前だけを危険に晒すものだったんじゃない。そこるところを

お前は全く分かって」

「あー、あのさ。白熱してるところ悪いんだけど」

「うるさい！ リノは引っ込んでろ！」

と、二人が口を揃えて怒鳴り散らした直後、二人は同時に視界の中に少女の姿を捉えることになる。

「……………」

「あ、あの……………」

少女のそんな一言に、水を打ったように静まり返る室内。

「……はあ。二人とも、少しは頭が冷えた？」

やれやれといった感じで、リノと呼ばれた女性がようやく胸を撫で下ろす。

「……すまない。少し、騒ぎすぎたな」

「……ふん」

とりあえず、これでようやく話ができるようになったようだ。

「驚かせてすまなかった。俺はアクセル。一応、このギルドのマスターを務めている」

少女とリノ、そしてキリヤを交えたテーブルで話は始まった。

「あなたの名前、聞いてもいい？」

「あ、はい」

少女の隣に座るリノが優しく聞くと、彼女は椅子に座ったまま両手を膝の上に付くような素振りをして答える。

「ハクアです。街の北にある、修道院でお世話になってます」

ハクアがそう名乗ると、リノとアクセルの視線が自然とキリヤへと集まった。

次はお前の番だと、声には出さずにそう言われているのだ。

「……キリヤ」

まだどこか機嫌が悪そうな感じでそれだけ告げると、キリヤはさっさと視線を逸らした。そんな態度にわずかに呆れるが、しかし気にせずアクセルは話を進めていく。

「ハクア。君にとっては決していい記憶ではないだろうが、いくつか確認したい。先刻、君を襲ったのは……」

「……………はい」

小さな声で頷き、ハクアは首を縦に揺らした。

「あの人達は……人売り、でした……」

「……………そうか」

答えを受け、アクセルは腕を組んで目を閉じた。人売りとは、読んで字のごとく人を攫って商売の道具にしている犯罪者達の総称だ。

二十年前に戦争が終結し、ようやく平和の兆しが見え始めてきたこの時代にも、こういった陰湿な犯罪は後を絶つことを知らないままだった。

特に人売りに関しては、ここ数年の間で飛躍的に被害の件数が増えてきている。街の治安を任されている騎士団も、この手の連中には手を焼かされているのが現状だ。

「連中、ほとんどやりたい放題ね。人気のない夜中ならまだしも、白昼堂々と行動に出るなんて……」

わずかに震えるハクアの肩に手を添えながら、リノは辛そうな表情で語る。

「……やつらは単独では動かない。常に最低二人以上で徒党を組んでいるからな。分かっているのは、やつらがある程度組織だったものの傘下において、その中に指示を出している親玉がいるってことだけだ」

アクセルはそう言うが、それは結局のところ何も分かっていないのと同じことだった。これまでも何人もの人売りを捕まえてきたが、どれだけ問い詰めても連中は自分の上に繋がる情報を一切開示しない。

いや、知らされてないと表現したほうが正しいのかもしれない。中には三日三晩のおぞましいほどの拷問を受けても口を割らなかった

者もいるらしい。

「どれだけ犯罪者を捕まえても、それだけで何かが終わるわけではない。完全に根絶やしにするには、遥か上で糸を引いている黒幕を、ひとまずは表舞台にまで引き摺り下ろしてやる必要がある。」

「アクセルもそこまでは分かっているのだ。分かっているのだが、どうにもならないというのが今の現状だった。」

「……今のままのやり方じゃ、ダメなんだよ」

「と、ここまで口を閉じたままだったキリヤがゆっくりと口を開いた。」

「絶対に、今の俺達みたいなのを見てどっかで笑ってるヤツがいる。そいつを引っ張り出して、二度とこんなふざけた真似ができないようにしてやらないと……そうでもしないと、こんなのがいつまでだつて続くことになっちゃう」

「……………」

「アクセルもリノも無言だったが、それは肯定と同じ意味だった。」

「誰かがどうにかしなくちゃいけない。そんな問題は、きっと世界中に溢れ返っている。きっと、多くの人達がそれをいつかはどうにかしなくちゃいけない問題だということは分かっている。」

「分かっている、何も知らない。何もできないでいるだけ。自分にはできないから。どうせ他の誰かがやるだろうから。きっと、その繰り返しだ。誰も悪くない。」

「……………だけど。それでも……………」

「…………ふざけんなよ」

「キリヤは思う。」

「ふざけんじゃねえよ」

「キリヤ…………」

「キリヤさん…………」

「キリヤは一度だけハクアとの視線を合わせ、すぐに外した。」

「……話はここまでだ」

アクセルは組んだ腕を静かに下ろし、溜め息とともに言う。いつの間にか、窓の外はうっすらと夕焼け色に染まり始めていた。

「キリヤ」

「ん？」

「ハクアを修道院まで送ってやれ。もうすぐ日が暮れる。一人で帰すのは危ない」

「……いいのかよ、俺で」

「そう言うな。任せたぞ」

「……ああ、分かった」

二人の会話はそれで終わった。キリヤは椅子から腰を上げ、壁に立てかけてあった自分の剣を腰に提げると、向き直ってハクアに言う。

「行くぞ」

「は、はい……」

夜が近いせいもあってか、大通りは多くの人々で賑わいを見せていた。ここは街の中でも多くの商店が軒を連ねる中央通りで、朝から晩まで多くの商人と買い物客で溢れ返っている。

そんな雑踏から少し離れた道の上を、キリヤとその一歩後ろをハクアが歩いている。

「……………」

「……………」

ガヤガヤと喧騒が響く中、二人の間に会話らしい会話は何もない。というよりも、キリヤがずんずんと先に歩くのをハクアが黙って着いていつているだけだ。街の北にある修道院まではもう少し距離がある。街の中央通りを突っ切るのが一番の早道ではあるのだが、この雑踏では逆に時間がかかってしまうので、今は比較的人ごみの少

ない道を歩いている。

「……………」

「……あの」

ハクアは一步先に行くキリヤの背中に小さく声をかける。

「ん？」

その声に気づき、キリヤは歩く足を止めた。

「その……リノさんに、聞きました。キリヤさんが……私を、助けてくれたんですね？」

「……ああ、そのことか」

答えはしたが、キリヤの表情はあまりよくはない。そんな表情の変化には気付かずに、ハクアは言葉を続ける。

「今更ですけど、ありがとうございます。キリヤさんがいなかったら私、今頃どうなっていたか……」

「……………どうだろうな」

「え…………？」

キリヤの答えに、今度はハクアが表情を崩す番だった。

「……悔しいけど、アクセルの言うことは正しいんだ。今回はたまたま、運が良かっただけの話だからな。一步間違えれば、俺だけじゃなくてお前も……」

キリヤはわずかに目を伏せる。分かっていたことだ。後先を考えずに首を突っ込むことは、いつか自分の身を滅ぼすことに直結するのだと。それが自分の身を滅ぼすだけならまだいい。自業自得だと笑い飛ばしてしまうこともできたかもしれない。

だが、そうじゃなかった。偶然かもしれない。けれど確かに、確実に、巻き込まれる誰かがそこにいる可能性は常にある。そのことを全く考えていなかった自分に、今更になって腹が立つ。口先だけの強がりを放っていた自分が、どうしようもなくやるせない。

「……俺は、お前を助けてやれたつもりでいた。けど、それは勘違

いだ。俺はまだ、何も救えてないし、救う覚悟もない。俺は……俺は、ただ………」

「………そんなことないです」

言いかけたキリヤの言葉を遮ってハクアが言う。

「少なくとも私は、あの場所にキリヤさんがいてくれたから今こうしてここにいます。ここにすることが、できるんです」

「お前……」

「……アクセルさんの言葉を借りるのであれば、確かにそれは危険なことだったのかもしれませんが。でも、キリヤさんは私を助けてくれました。助けてくれたじゃないですか」

「………」

「……偉そうなことを言ってますいません。でも………そんな風に、自分の何もかもを、否定したりなんてしないでください。だって、そうじゃないですか」

小さく息を吸い、ハクアは続ける。真っ直ぐに、目の前にいる確かなその人に向けて。

「——誰が何と言おうと、キリヤさんは私を助けてくれました。他でもない助けられた私がそう信じていれば、それはきつと真実なんですよ」

「………そうか」

「はい」

「なら、きつと、そうなんだろうな。他でもない、お前がそう言うなら………な」

そう言って、ようやくキリヤは少しだけ笑えた気がした。そして、同時に思った。ハクアを助けることができ、良かった。今は、それだけで十分だった。

第二話 名前

修道院の正門が見えてきた。

「あ……………」

同時に、その奥に一人の女性の姿を見るやいなや、ハクアは早足で駆け寄ってその名を呼ぶ。

「エリーナさん！」

その声に気付いてか、玄関先で掃き掃除をしていた修道服に身を包んだ女性が振り返る。

「あなた……」

手にしていた箒をその場に放り投げ、真正面から駆け寄ってくるハクアと同じ視線の高さに膝を折ると、そのまま勢いよく胸の中に抱きついてくる少女をしっかりと迎え入れる。

「ハクア！ あなた、今までどこで何をしていたのよ！ 本当に心配したんだからね！？」

腕の中でハクアを抱き止めながら、しかしわずかばかりに声色を張り上げてエリーナは言う。

「昼間にお使いを頼んでから、全然戻ってこないんだもの。他の皆も、神父様だつてとても心配なさっていたのよ？」

「ごめんなさい、エリーナさん。でも……」

そこまで言いかけてハクアは言葉を止めた。まさか人売りに襲われていたなんて正直に話したら、目の前のエリーナはショックのあまりにこの場で卒倒するかもしれない。どう説明すればいいのかと迷っているところで、助け舟が来た。

「そいつを責めないでやってくれ」

二人の様子をすぐ後ろで眺めていたキリヤが言う。

「そいつは何も悪くないんだ。むしろ、被害者の方なんだからな」

「あなたは……それに、今のは一体、どういう……………」

エリーナがそこまで言いかけたところで、修道院の正面玄関の大きな扉がギィと音を立てて開いた。そこから姿を現したのは

「エルザード様……」

「神父様……」

二人はその男の姿を確認し、口々にそう呼んだ。男性用の修道服に身を包んだ、やや初老の感が伺える男だ。歳の割には背丈が高く、髪の毛は灰色だがあちこちにうっすらと白髪のようなものが見て取れる。縁のない眼鏡をかけ、首からは銀の十字架を提げ、手の中には分厚い教典が抱えられていた。

「おお、ハクア。良かった、無事でしたか。夕暮れになっても戻ってこないから、念のため騎士団の詰め所に伺おうと思っていたところでしたが、どうやらその必要もないようですね」

エルザードと呼ばれた神父は柔和な笑みを浮かべ、ゆっくりと近寄ってくる。

「しかし、一体どうしたのです？　こんな遅くまで、どこか寄り道でもしていたのですか？」

「それは……その……」

エルザードに問われ、ハクアは再び返す言葉を見失って下を俯いてしまう。その様子がおかしいことに何となく気付いたのだろうか、エリーナとエルザードは互いに顔を見合わせると、すぐにその視線の先をその場にいるキリヤへと切り替えた。

「失礼ですが、あなたは？」

「……キリヤ。街の南にあるギルドに所属している騎士見習いだ」

「まあ、そうでしたか。では、あなたがこうしてハクアをここまで送り届けてくれたのですね？」

見習いとはいえ、騎士という肩書きのせいもあるのだろうか、エリーナは警戒心を解いたようにわずかに顔をほころばせて聞き返してきた。

「……それについては、もう少し説明に補足がある。ただ……」

言いかけ、キリヤはハクアに視線を移した。

「お前は、無理に立ち会う必要は……」

「ないんだぞと言うよりも早く、ハクアは首を小さく左右に振った。「いいえ、私も、自分の口からちゃんと話します。そうじゃないと、たくさん心配してくれたエリーナさんや神父様、他の皆さんにも申し訳がないです」

「……分かったよ」

小さく溜め息を吐いて、キリヤは頷いた。

「……どうやら、少し込み入った事情がおありのようですね」

何となくただごとではない雰囲気を感じ取ったエルザードが、眼鏡を人差し指の腹で押し上げながら言った。

「どうぞ、中へ入ってください。この時間なら、一般の参拝者の方も来ることはないでしょう。シスターエリーナ、あなたはハクアとキリヤさんに何か暖かい飲み物を出してあげてください」

「かしこまりましたわ」

言われてエリーナは一足先に修道院の中へと戻っていく。

「さあ、どうぞ。何も無いところですが」

そう言って促す神父に続き、ハクアとキリヤは招かれるがままに修道院の中へと入っていく。

修道院の中はがらんとしていた。木目調の床の上には、中央に真っ直ぐ続く赤い絨毯が教壇まで伸びており、その左右には長椅子がいくつも配列されている。教壇のさらに奥を見ると、その頭上には色鮮やかなステンドグラスが七色に光っていた。ガラスの中に描かれているのは数羽の白い鳩と、白い翼を生やした女性……いわゆる天使と呼ばれる美しい女性の姿だった。

芸術なんてものに全く興味もなく、どの宗教にも加入していない、そもそも神様なんてものを真面目に信じたことなんて一度もないキリヤだったが、そのステンドグラスは素直にきれいなものだと思うことができた。

「どうぞ。こちらの席へ腰掛けてください」

先に行くエルザードに促され、ハクアとキリヤはそれぞれ教壇に程近い場所の長椅子に腰掛けた。間もなくして奥の扉から、人数分の紅茶をトレイに載せたエリーナが戻ってきた。それぞれの目の前に白いカップが置かれてから、エルザードは静かに口を開く。

「では、早速ですがお聞かせ願えますか？ 一体ハクアに、何があったのかを」

その問いを受け、キリヤは口を開く。

「実は……」

キリヤは今日の昼間に起こった一連の出来事をおおまかに説明した。手配中の犯罪者にハクアが襲われ、攫われそうになったこと。たまたまその犯人を追っていたキリヤが、結果としてハクアを助けることになったこと。そして今までの時間、ハクアをギルドの仲間と一緒に介抱していたこと。夜も近くなってきたので、こうして修道院まで送り届けたこと。

その全てを聞き終えて、エリーナは少なからず顔を青くしていた。エルザードは無言のまま言葉を聞き続けていたが、その表情には確かな不安の色のようなものが見て取れた。

「……大体こんなところだ」

「……そうでしたか。そんなことが……」

吐き出すようにして呟いたエルザードの表情は、さっきよりもずいぶんと老け込んでしまったように見えた。本当に心の底から、ハクアの身を案じていたのだろう。

「……神父様、エリーナさん。ごめんなさい、私……私が、もっと気を付けていたら、こんなことには……」

「いえ、いいですよ。あなたは何も悪くありません、ハクア。悪いのは、そういった行いを良しとして平気で行える人の心と、それを許容してしまっている今の世界の方なのですからね」

「そうよ。あなたは何も悪くないわ。もとはと言えば、私があなたにお使いなんて頼んだりしなかったら、こんなことには……」

言いながら、エリーナはそっとハクアの肩を抱き寄せた。

「あ……」

何か言いたそうなハクアの言葉を遮って、エリーナはもう一度、少しだけ強くその体を抱きしめる。

「本当に……無事で良かった。あなたに何かあったら、私は、私は……」

その手がわずかに震えているのが、ハクアには分かった。

「……ごめんなさい、エリーナさん。ごめんなさい……」

エリーナはハクアのことを実の妹のように可愛がっていた。血の繋がりがこそないものの、この修道院で何年も一緒に生活を送ってきた、家族のような存在なのだ。そしてハクアもまた、そんなエリーナを本当の姉のように思ってきた。二人の間にある絆は細いが、とても強い。

「ひとまずは、あなた達が無事で何よりでした」

ようやく顔を上げたエルザードが、ハクアとキリヤの顔を交互に見据えながら言う。

「キリヤさん、改めてお礼を言わせてください。ハクアを救ってくれて、ありがとうございます」

「……よしてくれ。俺は、そんなんじゃ……」

言いながら逸らした視線の先で、今度はハクア目が合った。相変わらずハクアは、小さく微笑んでくれるだけだった。

「……俺、そろそろ戻るよ。やらなくちゃいけないこと、まだ残ってるから」

「そうですか。途中まで送りましょうか？」

「いや、いいよ」

「分かりました。では、お気をつけて」

キリヤは修道院を後にする。外はすっかり日が落ち始めていたが、夜と呼ぶにはまだ早い。そろそろ帰らないと、夕飯の時間に遅れればリノがまたうるさくなる。ギルドで生活を共にしている他の仲間達も、もうすぐ戻ってくる頃だろう。

「キリヤさん！」

そんなことを考えながら歩き始めたキリヤの背中を、ハクアの声呼び止めた。返事はせずに振り返ると、ハクアが修道院の入り口の正門の辺りまでやってきていた。

「……何か用か？」

「あの、今日は本当に、色々とうございました。アクセルさんやリノさんにも、よろしく伝えてください。それと、今度改めてお礼に伺ってもいいですか？」

「そんなに気にすんなよ。それに、いちいち街の反対側まで来るのも面倒だろう。」

「そんなことないですよ。私、歩くのは好きですから」

「……まあ、別に構わないけど」

「はい。じゃあ、今度必ず」

「その時は、変なやつらに絡まれるなよ」

「あう……き、肝に銘じておきます……」

あははと苦笑いを浮かべるハクアに、キリヤは少しだけ呆れた。

「じゃあな」

「はい。キリヤさんも、気を付けてくださいね」

「……………」

そんな言葉を背中越しに聞いて数歩歩いたところで、キリヤはもう一度だけ足を止めた。

「……おい」

そして今度は、こっちからハクアの背中に向けて声を投げる。

「はい？」

振り返り、ハクアは聞き返す。そうして向かい合ったまま、少し

だけ空白の時間が流れた。五秒か、十秒か。やがてキリヤは小さく息を吸い込んで、一つだけ言った。

「————キリヤでいい」

「……え？」

ハクアは最初、その言葉の意味が良く分からなかった。

「だから……その、さん付けで呼ぶの、やめろ。呼び捨てで、いい」

「あ……は、はい！」

どういうわけか、ハクアの返事は元気が良かった。

「じゃあ、私も同じがいいです」

「……あ？」

今度はキリヤが間の抜けた声を出す番だった。

「私のことも呼び捨てでいいですから、できればちゃんと……名前
で呼んで、ほしいです」

「……」

キリヤは少しだけ迷った。こんな風に切り返されるなんて思っていなかったからだ。だから、少しだけ、困った。けれど

「……じゃあな。ハクア」

何とか、背中越しにそう言うことはできた。

「……はい！ またね、キリヤ！」

もう答えるのも億劫になって、キリヤは背中越しに軽く手を振ってその場を離れた。

おかしい。ギルドの皆にも、知り合いのやつらにも、ずっと名前
で呼ばれ続けていたはずなのに、アイツのは……ハクアのは、どこ
か違うような気がした。

正直、少しだけ照れ臭い……と思う。はっとなって我に返り、キ
リヤは思った。ここにリノがいたら、一晩中かけてでもいじくり倒

されていたのは間違いない。どうか、ギルドに戻るまでのこの帰り道の上で、少しでも赤くなったこの顔が元に戻ってくれますようにと思いつつ、キリヤの足取りは速かった。

第三話 深夜の宴(1) 一すれ違う二人

夜の帳が落ちた頃、修道院の中に一つの人影が動いていた。

「お母さん。今日は、色んなことがあったよ」

声の主はハクアだった。教壇の前、薄暗い室内で両膝を折り、両手を祈るように合わせて呟く。明かりは消え、光源と呼べるものはステンドグラス越しの夜空から降り注ぐわずかばかりの月光のみ。その光がハクアの真っ白な修道服をうつすらと染め上げているように、まるで淡い光に包まれているようにも見える。遠目に見てもその姿はとても神秘的に映ったことだろう。

祈りを捧げるようにハクアは言葉が続ける。それは、今はもういない母親に向けての言葉だ。

「……それでね、キリヤが私を助けてくれたんだ。すごいんだよ、キリヤは。私と同じくらいなのに、もう騎士の見習いなんだって。私ももっと、しっかりしないとダメだよね」

そんな風に少しだけ自嘲めいてハクアは笑う。人気のない修道院の中は静寂に包まれていて、そんな微かな小声さえも反響して大きく響いてしまいくるようになる。

この修道院には、ハクア以外にも何人かのシスター達が寝食を共にして生活している。彼女達のが寝泊りするはこの修道院そのものの中ではなく、中庭を通じて造られた小さな寮のような場所だ。もちろんハクアの部屋もその寮の中にあるのだが、ハクアは時々こうして寮を抜け出し、今日一日の出来事や悩み事などを天国の母親に向けて報告していた。

それら全てに等しく、正しい答えが返ってくるわけではない。が、ハクアは特に嬉しいことがあったときはこうして、天国の母親にそのことを届けていた。届かないかもしれない。でも、祈りを捧げることはできる。願いだって、願わなければ叶いはしないのだから。

「よし」

一通りの言葉を天に投げかけて、ハクアは月明かりの下で静かに立ち上がる。夜もだいぶ深まってきていた。春になったとはいえ、夜になれば冬を思わせる肌寒さは今の季節も健在だった。少しだけその寒さに身震いをさせて、ハクアは静かにその場所をあとにする。そのときだった。

「……あ、れ？」

ふと、自分の首の辺りに妙な違和感を覚えた。それは痛みや肌寒さといったものではなく、もっと別のものだ。

「うそ、ない……？」

ハクアは自分の首と胸、その両方を手探りで触れて気付く。

「ペンダント、落としちゃったのかな……」

それはハクアにとつての大切なお守りだった。今は亡き母親と一緒に写った写真が収められた、銀のペンダント。いつも片時も肌身離さず持ち歩いていたはずのそれが、いつの間にかなくなってしまっていた。そんな大事なことに今更気付くなんてとも思うが、振り返ってみれば仕方のないことだろう。

何せ、今日一日は本当に色んなことがあった。一步間違えたらその命を落としてしまったかも知れないのだ。様々な意味で、今日という日は運命の分岐点だったのかもしれない。しかし、それとこれとは話は別だ。

「どう、しよう……。あ、もしかしたら……」

ふとハクアは思った。もしかしたら、キリヤが自分を助けてくれたときにペンダントを拾ってくれているかもしれない。あの怪しい二人組の男達に連れて行かれそうになったときまでは、ペンダントは確かに首から提げていたことは覚えている。それだけは間違いない。

「明日になったら、聞いてみないと」

今日はもう時間が遅い。夜が明けて、明日になったらもう一度キリヤのギルドを訊ね、ペンダントのことも聞いてみることにしよう。と、そこまで考えたときのことだ。

カツン、と。ふいに背後からそんな音が聞こえた。あわてて振り返ると、そこに

「ハクア、ですか？　こんな時間に、一体どうしたのです？」

ランタンの明かりを手に持ったエルザードがそこに立っていた。

「……どうしたんです？　そんなところに座り込んで」

エルザードは目の前で金魚のように口をパクパクさせて座り込むハクアを見て、不思議そうに訊ねた。

「し、神父様？　お、驚かさないでください……」

半分泣き顔になりながら、しかしハクアはまだ腰を上げることができない。情けない話だが、今の驚きで腰が抜けてしまっているようだ。

「やれやれ。怖がりなのに、こんな真っ暗なところで何をしているかと思えば……」

エルザードはそつと片手を差し伸べ、ハクアの体を引っ張り起す。

「す、すいません……」

「まあ、怪しい真似をしている様子ではないからよしとしましょう。しかし、春になったとはいえ夜の寒さはまだまだ厳しい。こんなところに長居しているのは風邪を引きます。何事もほどほどにね」

「はい。ご心配おかけしました」

「いえ、分かればいいのですよ」

「それじゃ私、そろそろ部屋に戻ります。おやすみなさい、神父様」

「ええ、おやすみなさい………と、そうそう。少しいいですか、ハクア」

歩き出した背中を呼び止め、エルザードが声をかける。

「はい、何でしょう？」

「さっきはエリーナもいたので聞くに聞けなかったのですが……その、あなたを襲った二人組の男についてですが……」

「……はい」

「……いえ、失礼。こんな、わざわざあなたの傷口を抉るようなことは聞くべきではないですね。すいません、失言でした」

「そんな、気にしないでください」

「いえ、いいですよ。ただ、もしあなたが二人組の男の特徴などを覚えていたのであれば、周囲に警戒を促すこともできるかもしれないと思ひましてね」

「あ……」

「……覚えている範囲で構いません。何か、特徴はありませんでしたか？ 髪の色や顔つき、身につけていた珍しいものなど、何でもいいのです」

「……すいません。私、すぐに叩かれて気を失っちゃったから……」
「そう、ですか。いえ、そんな顔をしないでください。あなたは何も悪くない。あなたは被害者の立場なのだから」

「……あ、でも、髪型と髪の色は覚えています。片方は茶色で、もう片方は黒でした。髪のは長さはどっちの男の人も短く切り揃えて、逆立っている感じで……」

「……ええ」

「……それと……そう、だ。確か、二人揃って二の腕の辺りに……」
記憶が鮮明になって思い出される。そうだ、確かにあの二人組はそれぞれ、まるでトレードマークか何かのように……。

思い出し、それを言葉にして吐き出そうとした、その直前。

「——二の腕の辺りに、真っ赤な布を巻き付けていた……ですか？」

「……ええ？ あ……そ、そうです。その、真っ赤な布を……」

…？」

「……そうですか。やはり、そうでしたか」

ランタンの炎の中で、エルザードの表情がわずかに揺れる。

「……神父、様？ あ、どうして……」

「もしやとは思ったのですが、やはりね……」

エルザードの声色が低くなっていく。感情の色が読み取れなくなり、場の空気そのものが異様な質へと変化していくようだ。

「……………」

ハクアは聞けない。一番聞きたいその言葉が、喉の手前で引つかかってしまったように出てこない。喉がからからに渴いていた。にもかかわらず、背中には嫌な汗がじっとりとにじみ始めているのが良く分かった。頬を一筋の汗が伝う。一瞬で冷えたそれは、氷のような冷たさを携えて流れ落ちて

「……っ！」

いくことはなかった。そうなる前に、エルザードの指の腹がその水滴を掬い取ったからだ。冷たい冷たい、人のものとは思えない温度の指先で……。

「……………」

「……神父、様……あ、あの……」

「……ああ、すいません」

温度のない声だった。それはもう、ハクアが知っているエルザードという人間のものとは、全く別の……別の、何か。

「……………」あの役立たず共が殴り付けた頬は、こちら側でしたか？」

「っ……っ！」

寒気が吹き飛んだ。そして同時に、ハクアは全てを理解した。理由はそれしか見当たらなかったのだ。本来なら絶対知りえないはず

の事実を、目の前のエルザードが知っている理由。それは、つまり。
「あ、う……………」

そこから先を考えるよりも早く、ハクアは意識を失った。エルザードの手には白い布が握られており、それによって鼻と口を塞がれたハクアは深い眠りへと落ちてしまっていた。

「君にはまだ、役に立ってもらわないといけないですよ」
温度のない声が、静かに笑った。

「……………さあ、間もなく宴の開演だ」

「ねえ、リノ。これ何？」

そう言っただけで差し出された手の中には、見覚えのない銀色のペンダントが握られている。

「それ、どこにあったの？」

聞かれたリノが聞き返すと、彼女は……同じギルドのメンバーでもあるメルフィネは自分のベッドの隙間を指差しながら

「そこに落っこちてたよ」

と答えながら、ペンダントをリノに手渡した。

「ん……………あ、もしかしたら」

しばらく眺めても見覚えのなかったリノだが、ふいに今日の昼間のことを思い出した。

「これ、ハクアちゃんの忘れ物かも？」

「誰よ、そのハクアって？」

「あー、実はちょっと今日の昼間に、色々あってね」

リノが続けて口を開こうとしたところで、部屋の扉が二回ほど軽くノックされた。

「どうぞー」

ベッドに腰掛けたままのメルフィネが答えると、ドアノブが廻っ

て一人の男が入ってきた。

「おい、晩飯の準備できたってよ。もう皆揃ってるから、お前らも早く降りてこいよ」

「やっほう！ 待ち詫びた！」

晩飯と聞くや否や、メルフィネは勢いよく部屋を飛び出していく。

「お、おい。階段から転がり落ちても知らんぞ！」

「大丈夫大丈夫！ そんなことより、早くしないとアンタの分も食べちゃうからな、ユーク！」

「ば……おい待てふざけんな！ こっちはお前以上に腹ペコだっつーの！」

メルフィネの背中を追いかけてユークもどたばたと階段を駆け下りていく。

「リノ！ お前も早くこいよ！」

「あ、うん」

とりあえず手の中のペンダントをポケットの中にしまい、リノも一階の食堂へと急いだ。

「うまいおいしいおいしいうまいうまおいうましい！」

「ちよっとメル、食べるか喋るかどっちかにしなさいって」

「ふあぐ、ふあふいんふいぐふあふあ、ふあぐふあぐむほ！」

「どこの国の言葉だそれは……」

ひたすらに食べ続けるメルフィネ、注意を促すリノ、そしてとりあえず突っ込んでおくアクセル。

「いやー、いつ見てもメルフィネの食べっぷりは、見てるこっちが食欲をなくすくらいすごいよね」

「そんだけ食ってるのに、どうして同じ体型を維持できるんだ？」

「……飯くらい静かに食べよな」

なんだか言葉が矛盾しているアルフレッド、素朴な疑問を口にするユーク、呆れるキリヤ。

こうして今日も騒がしく始まった食卓に、ギルド【雨宿り】のメ

ンバーは揃っていた。

メルフィネはギルドの中で最年長の女性で、主に土木関係の仕事で生計を立てている。女性で土木関係なんて似合いそうにない感じが、本人いわく賃金が高く、体を鍛えるにもちょうどいいから割に合っているとのことだ。こう見えてちょっと有名な格闘技マニアだったりする。ちなみに彼女のことをメルと呼ぶのは、ギルドの中ではリノだけである。

アルフレッドは狩で生計を立てる、いわゆるハンターだ。街の近くの森を主な縄張りとしていて、そこで獣や野草を調達し、市場で売って生計を立てている。単独で行動することもあれば、ハンター仲間と組んで大掛かりな狩を行うことも少なくない。見た目はのんびりしているが、頭の回転が速い。自分の名前が長いので、ギルドメンバーや仲間内にはアルと呼ぶように頼み、これで通じている。

ユークは工匠、いわゆる鍛冶屋だ。鍛冶屋と一口に言っても単純に武器を作ったりするだけではなく、修理なども請け負っている。場合によっては自分の足で炭鉱や洞窟に入り込み、市場にあまり出回っていないレアな鉱物などを採取したりもする。商売人としても顔が広く、街の中の商人達にはかなり顔が利く。メルフィネと同じくギルドの中では最年長者で、頼れる兄貴分と言ったところだろうか。

そんなこんなで夕食の時間はあっという間に過ぎていく。男性陣はテーブルの後片付けを、女性陣は洗い場で食器類を洗っている。

「あ、そうだ」

と、洗い物を終えたばかりのリノが思い出したように言った。

「キリヤ、これ」

言いながら手渡されたのは、先ほどメルフィネのベッドの横に落

ちていた銀色のペンダントだ。

「何だよこれ？」

「多分、ハクアちゃんの忘れ物だと思うのよね」

「それで？」

「それ、ハクアちゃんに渡しといて」

「……何で俺が？」

「ぶつくさ言わないの。送り届けてあげた仲でしょ？」

「っ、それとこれとは関係」

ないだろうと言うよりも早く、並んで洗い物をしていたメルフィネが食いついた。

「何！？ 送り迎えの仲！？ なんだよキリヤ、お前も隅に置けないな。もうそんないい子を見つけたのか！？」

まず、その言葉に食後のコーヒーを口にしていたユークが盛大に吹いた。もちろん、コーヒーごと。

「お、おま……まさか、もう手を出したんじゃないだろうな！？」

「ば……な、何だよ手を出すって！ 無理矢理そっち方面に話を結び付けようとすんな、バカユーク！」

「いやあ、もしかしてキリヤにもモテ期到来？ まあ、目つきはちよつと悪いけど、黙ってればなかなかの色男だしねえ」

十代も半ばの少年に対して色男はどうかと思うが、ほとんど悪乗りの要領でアルフレッドが続けた。

「目つきが悪いのは生まれつきだ！ 余計なお世話なんだよ！」

そんなやりとりをアクセルだけはやれやれといった感じで眺めている。週に何度かはこんな状態になるので、もはや慣れてしまっているのだろう。

「はいはい。まあそれはそれとして」

洗った食器を一通り拭き終えてリノが続ける。

「明日でいいから、時間見つけて返してきてあげてよ」

「だから、何で俺が。リノが行けばいいだろ」

「私は明日予定があるの。他の皆だってそれぞれに仕事があるんだから、この中で時間に都合が付くのはキリヤくらいでしょ？」

「ぐ……」

悔しいがその通りだった。騎士の見習いにはなったものの、そんなにすぐに騎士としての任務がやってくるわけではない。ほとんどの場合が緊急時に備えての待機命令と似たようなものなのだ。

「……分かったよ」

リノからペンダントを受け取ると、キリヤはすぐにそのまま玄関へと向かった。

「ちよっとちよっと、どこ行く気なの？」

「ま、まさか……」

メルフィネが割と大真面目な様子で真剣に聞く。

「————よ、夜這いか!？」

その爆弾発言に再びコーヒーを噴出すユীগ。今度は鼻からも得体の知れない液体と一緒に噴出していった。

「ああもう！好きなだけ勝手に騒いでろ！」

ボタンと勢いよく扉を開け放つと、キリヤはそのまま夜の街に向かって走り出した。

「良かったの、行かせて？」

見届けてからアルフレッドがアクセルに訊ねた。

「いいさ。何だかんだであいつも、少しでも早くあの子を安心させてやりたいんだろう」

そう言い切ったアクセルの顔は、どこか満足気だった。

夜はまだ深まっていらない。行って忘れ物を渡すくらいなら、特に問題はないだろう。

第四話 深夜の宴（2） 一消えた少女一

時間もすっかり遅くなってしまったせいかな、修道院の正門は閉まっていた。が、鍵まではかかっていないようで、無用心だなとは思いつつもキリヤは敷地の中へと足を踏み入れる。

建物の明かりはすっかり落ちていた。昼間はどことなく荘厳な雰囲気をかもし出す修道院だが、こうして辺りが暗くなってから改めて見直してみると、少なからず不気味な感じがしてしまうのは気のせいかな。

「……さすがに、時間が遅かったか」

何度か玄関の扉をノックしてみたが、内側からは何の反応も返ってはこなかった。無駄足を踏んでしまった感は否めないが、さてどうしたものだろうか。

と、少し辺りを見て廻ってキリヤは気が付いた。建物の裏へ続く方に整備された道がある。暗がりではあるが、そこだけが月明かりに照らされてはつきりと見えたのだ。キリヤはそちらの方に歩を進めていく。

道なりに真っ直ぐ行くと、そこに修道院とは別の木造の建物が見えてきた。建物のあちこちには明かりがついており、中には人がいることを示している。

ここは修道院に所属するシスター達が寝食を共にしている寮だ。そのことを知る由もないキリヤだが、修道院に誰もいない以上こちらを訊ねる他ない。

建物の正面のドアを何度かノックする。最初の数回はまるで反応がなかったが、明かりがついている以上は中に誰かしら人がいるのは間違いないはずだ。

何度目かのノックの後、内側からぱたぱたという足音のようなものが聞こえてきた。それを聞き取り、キリヤは玄関から一歩下がる。

「はいはい。こんな遅くにどちら様？」

と、内側からはそんな女性の声が聞こえてきた。キリヤにも聞き覚えのあるその声の主は

「あら？ あなたは確か、昼間の……」

昼間に顔を合わせた、シスターのエレーナだった。

「夜遅くにすまない。迷惑だとは思ってたんだが……」

そこまで言いかけて、キリヤは一度口ごもる。まさか、ギルドの連中にからかわれてこんな夜更けに出向く羽目になったなどと、そんなことはとてもじゃないが口が裂けても言えやしない。

「キリヤさん、だったかしら。間違ってたらごめんなさいね」

「いや、それで合ってるよ」

「ところで、こんな夜遅くにどうしたの？ 何か用事でも？」

「いや、用事ってほどのものでもないんだけど……」

やや口ごもるキリヤを見て、エレーナはしばらく怪訝そうな顔をしていた。が、心当たりが思いつくや否や、わずかに………というか、人をからかうような子悪魔じみた笑顔に表情を変え、にやにやと笑いながら聞いてきた。

「もしかして……ハクアに用事があったのかしら？」

「っ！？」

まんまと胸のうちを言い当てられ、キリヤは反射的に視線を逸らす。しかしこの状況では、それはただの火に油を注ぐ行為に他ならない。エレーナはなるほどなるほどと自分勝手に頷き、そして自分勝手ににやけていた。

「そ、そんなんじゃない！ 俺はただ、あいつに忘れ物かもしれないのを届けにきただけだ！」

「あら？ あらあら？ あらあらあら？ そんなんじゃないって、どんなにかしら？ 私、まだ何も言っていないのだけど？」

「……………っ！！！」

完全にかかわれている。話すだけ時間の無駄な気もしたので、キリヤは早々に要件だけ済ませてしまおうと心に決めた。

「と、とにかく！ ほら、これ」

ポケットの中から預かった銀のペンダントを取り出し、エリーナの鼻先に突きつける。

「あら？ これは確か……」

「……やっぱ、あいつのか？」

「ええ、そうね。間違いないわ。でも……」

「……いえ、何でも無いわ。そうよね、あれだけ怖い目に遭っていたら、その一瞬くらいは忘れてしまっても仕方ないわね……」

「何のことだ？」

独り言のように語り出すエリーナに思わずキリヤは聞いた。

「ああ、ごめんなさい。こっちの話よ、気にしないで」

が、エリーナは次の瞬間にはいつもどおりの表情に戻っていた。

「さあ、入って。夜の風は寒いでしょう？」

「いや、俺はいい。あとはあんたが、あいつにこれを届けてくれればそれで」

そこまで言いかけて、キリヤはエリーナに半ば強引に襟首を掴まれて中へと引きずり込まれた。

「な、何すんだ！？」

ボタンと、しかし背後ではしっかりと玄関の扉が閉まる音がする。

「おい、用件はもう済んだんだ。俺は」

もう帰ると言い切るより早く、今度はエリーナが銀のペンダントをキリヤの鼻先に突きつけていた。

「迷惑ついでに、もう一つ頼まれてくれない？」

「……っ？」

「このペンダント、あなたの手であの子に渡してあげてほしいの」「何で俺が、そんなこと」

「お願い」

「っ……」

別に睨まれたわけでも、すごまれたわけでも、脅されたわけでもない。ただ、エリーナの目はとても真剣な表情をしていた。無視して視線を逸らすことはいくらでもできたが、キリヤは正面からその目を真っ直ぐに見返した。悪ふざけやその延長で人にものを頼むような目ではなかった。それだけは、はっきりと分かった。

「……………分かったよ。ったく、どいつもこいつも……………」

立ち上がり、キリヤはしぶしぶとだがペンダントを受け取る。

「ありがとう」

そう言って、エリーナは小さく微笑んだ。

「きっと、ハクアもその方が喜ぶと思うのよね」

「……………」

その根拠はどこから来るんだろうと、キリヤは思ったが口には出さなかった。どうせ答えが返ってこないことなんて、分かりきっていたから。

「ハクア、ちょっといいかしら？」

エリーナが部屋のドアをノックしながら声をかける。

寮の一階の奥の部屋。そこがハクアが寝泊りをしている一室だ。

キリヤは今更になって引き受けたことを後悔し始めていた。廊下で何人かのシスターとすれ違ったときもそうだが、自分という存在がひどく場違いだということは良く分かった。ひそひそと背中越しに囁かれている会話の内容も何となく予想はつく。つくが、こっちから火の中に飛び込む必要もないのでとりあえず聞き流しておいた。とまあ、それはさておき。

「……………おかしいわね。もう寝てしまったのかしら？」

「寝ているなら、無理に起こさなくていい。やっぱりあんたが手渡

すか、どうしてもダメだってんなら、明日また出直すよ」

「……ちよっと待ってね」

エリーナはドアノブに手をかけ、ひねってみる。鍵はかかっていなかった。それを確認すると、エリーナは

「ハクア、入るわよ？」

それだけ言って、扉を静かに押し開けた。

部屋の中は真っ暗だった。窓は閉まっているが、思わず身震いするほどの肌寒さを感じる。

「……ハクア？　いないの？」

その問いに対しても返事はない。暗闇の中、エリーナは手探りで部屋の中へと入っていく。

「おい、いいのか勝手に入って……」

「待っていて。今、明かりをつけるから……」

おそらくは寮の部屋の間取りはどれも同じで、ベッドなどの家具の配置も固定なのだろう。まるで自分の部屋のようにエリーナは暗闇の中を進み、テーブルがあるであろうその場所で火の灯っているランプを手にする。

その後ポケットの中からマッチを取り出すと、それを擦って火を起こす。それをランプの中の油がしみた紙に付けると、部屋の中がようやく明るさに包まれた。だが、そこには

「ハクア……？」

「……いない、のか？」

部屋の中にハクアの姿はなかった。

そう広くない部屋を隅々まで見渡すが、やはりその姿を確認することはできなかった。

「どうしたのかしら……」

「……風呂とか、トイレじゃないのか？」

もっともらしい可能性を提示するキリヤだが、これにはエリーナ

が首を横に振る。

「入浴はもう済ませたはずだし、お手洗いはさっきまで私が使っていたけど姿は見えていないわ」

「じゃあ、どこに行っちゃったっていうんだよ。こんな時間に出歩いてるってのか？」

キリヤが言ったところであまり説得力はないのだが、確かにもう夜もだいぶ深まっている。少なくとも、安心して大手を振って歩いてられる時間帯ではない。

「分からない。分からないけど……」

言いかけて、エリーナはキリヤの目から見てもはっきり分かるくらいに身震いした。それは多分、夜の寒さのせいではない。

「……嫌な、予感がするの。あの子に、何かあったんじゃないかって、そんな……」

「……………」

「……修道院を探してみるわ。あの子、時々だけど部屋を抜け出してあそこにいることがあるみたいだったから」

「……俺も行く」

キリヤの言葉に、エリーナは一つ頷いて答えた。その顔色は、すでにうつすらと青ざめ始めている。

「……ハクア？ いるの？ いたら返事をして……」

修道院の中へ入ったキリヤとエリーナは、ランタンの明かりを頼りに内部を探し始めた。当たり前だが人の声も気配もしない。それはついさっき、玄関扉をノックして反応がなかったことを知っているキリヤには当然のことだった。

静謐とした空間は、それだけで時折耳鳴りにも似たおかしな音を耳へと運んでくる。それらを全て無視して、キリヤとエリーナはそれぞれランタンを手に中を歩き始める。

「……………」

しかし、当然のように人影などはあるはずもない。声も気配も感じなければ、別の光源も見当たらない。それでも必死になって探ししてしまうのは、ここにいてほしいという願望からなのだろうか。

逆に言えば、ここにいないければ一体どこへ行ってしまったというのか。少なくとも、エリーナには見当も付かない。そしてそれは、キリヤにとっても全く同じことだった。

「……あのバカ、どこをほつつき歩いて」

いるんだと口に出そうとしたとき、キリヤのその足が何かを蹴った。床に躓きそうになったわけではない。そもそも段差などはないし、歩いているのは赤い絨毯の上だ。転びそうになる理由はまるで見当たらない。と、いうことは……。

「……」

つま先にぶつかって多少なりに蹴飛ばしてしまったそれを、キリヤはランタンの火で追いかける。赤い絨毯の床が真っ直ぐに続き、左右には長椅子が整列している。ただ、それだけ。それだけが続いている闇の中に、しかしそれは……………。

「……………」

それは

「……………っ!？」

確かに、あった。

カタンと音がした。それは、ほぼ同時にそれを見つけたエリーナが、手にしていたランタンを長椅子の上に置いた音だった。

「……………うそ……………何、で……………? どう、して……………これが、ここに……………?」

その顔色は青を通り越して黒に染まり始めている。信じられないという表情。あってはならない光景を目の当たりにした者の表情。

「ハク、ア……………」

声にならない声で、エリーナがそれでもどうにか搾り出す。ここにもいなかった、少女の名を呼ぶ。

———そこに、片方だけの靴が脱ぎ捨てられていた。

それが誰の物なのか。聞かなくても、もう十分すぎるほどに理解できていた。

「……………ハクア……………ッ！」

不思議と、握る手に力が込められていた。その理由は、今はまだ、よくは分からない。

第五話 深夜の宴(3) 一魔笛が告げる25時一

深夜の港に人影なんてあるはずはない……のだが、どうやら今夜だけは事情が違ふようだ。

「おお、いるいる。金だけは持ってそんな貴族や遊び人がわんさかだ」

物陰からそう言ったのは、その場には不釣り合いすぎるほどの巨大な鎚を背負ったユーグだ。

「ほんと、金ってのはあるところにはあるもんだね。国境の辺りの貧民街じゃ、毎日五人は人が飢えて死んでいって話もあるくらいなのに」

続けて口を開いたのは、近くの大木の枝に腰をかけたアルフレッドだ。辺りを暗闇一色が支配する夜の中でも、ハンターであるアルフレッドの夜目は正常に機能していた。

「ざっと見て、百五十人ってとこかな。ま、こんだけ溢れてれば逆にそう簡単には見つかったりしないだろうから、かえって安心かもね」

「だといいんだがな……」

アルフレッドの言葉に素直には頷かず、ユーグは遠巻きに人ごみの様子を食い入るように眺める。あの中に今、アクセルとキリヤが紛れ込んでいる。

「ま、今は無事を祈ろうよ。大丈夫、アクセルが一緒なら、滅多なことにはならないさ」

「そう、だな……」

ユーグは今度こそ頷き、静かに視線を戻そうとして

「……………アル」

「……はあ。やっぱ、こうなるのか」

背後から近づいてくるいくつかの気配に、二人はほぼ同時に気付

いた。

「よお。こんな夜中に散歩かい、兄さん達？」

声の主は男のものだった。数は五人、全員が似たような服装に身を包み、共通点はその二の腕の辺りに暗闇でも目立つくらい真っ赤な布が巻きつけられている。それは、数刻前にアクセルから聞かされたある男達の特徴と一致した。

「おいおい、黙ってたんじゃないからねえよ。何か返事したらどうなんだ？ ああ？」

「よせよ。こいつ、ビビって固まっちゃってんじゃないかねえの？」

そこでお決まりのような下衆笑いが響いた。男達はそれぞれ顔つきも声色も何から何まで違ってはいたが、品のない笑い声と腐った道の上を歩いてきた時間だけは同じようだった。

「……なるほどな。こりゃ、キリヤがキレルのも頷ける」

「同感」

ユーグとアルフレッドのそれだけのやり取りに、男達は示し合わせたかのようにぴたりと笑うことをやめた。こういう部分だけ無駄に統率が取れているというか、何と言うか……。

「お前ら、何普通に会話しちまってるわけ？」

「テメエの置かれた状況、まだ分かんねえのかよ？」

「あんまり調子乗ってる、このまま海の藻屑にして」

そこまで言ったところで男の声が止んだ。代わりに聞こえてきたのは

「ぎ、っやああああああああっ!？」

相変わらず品性の欠片も感じさせない、耳障りな断末魔だけだった。見れば、男の右足の大腿部を一本の銀の矢が貫いていた。傷口からはどんだん血が溢れ出し、男は絶叫と共に傷口を抑えながらバカみたいに地面を転がっている。

「て、テメエ！」

「こんなことして、タダで済むと思ってんのかあ!？」

残りのバカ共が口々に喚ぐが、とりあえずアルフレッドは無視した。代わりに、二の矢三の矢と立て続きに弓を引き、二人目の右肩と三人目の左足を潰した。追加で二人分の絶叫が響き渡るが、これについても同じように無視する。

「おたくらがこっちの事情を知ったこっちゃないようにさ、こっちもおたくらの事情や、ましてや素性なんてどうだっていいんだよね」
淡々と、しかし確かな怒りの色でアルフレッドは告げる。

「別に興味なんてないし、正義の味方として僕達は動いているわけじゃない。けどね」

一度言葉を区切り、アルフレッドは残った五体満足の男をそれぞれに睨みつける。すでに三人の仲間がやられていることもあってか、残された二人の男はわずかに身を引く。それさえも無視して、アルフレッドは続けた。

今、こうして自分がここにいる理由。意地っ張りで素直じゃない、負けず嫌いで口が悪い少年から受けた、たった一つの言葉を。その言葉を思い出して、はつきりと告げる。

「————あいつをあれだけ怒らせたんだ。それ相当の痛みは、お前達にも味わってもらおう」

確かな敵意を含んだその眼光だけで、すでに傷を負った三人が地面を這いずるようにして後退した。

「無駄なことはしないほうがいいよ」

その言葉を合図にしたかのように、今の今まで一言も発さなかったユークが静かに動いた。その手には、巨大なハンマーのような鈍器が握られている。素人目に見ても重量は軽く百キロは超すであろうそれを、しかしユークは片手だけで軽々と持ち上げていた。

「彼は、僕ほど優しくはないから」

アルフレッドのその言葉が止めになった。

「ひ……や、やめろ！ やめてくれええええっ！」
一人がそう叫ぶと、あとはもう芋づる式だった。ただ一つ、運がなかったのは

「————そうやって助けを求めた人達を、お前たちがどうしてきたか。その身で知ることだな」

目の前にいる鈍器を手にした男は、悪党の都合のいい命乞いをやすやすと受け入れるような、甘い人間ではなかったということだ。
直後に、ドゴンガゴンと鈍い音が港の隅で響き渡った。

事態が動き出したのは、今から少し前のことだ。

まず、キリヤが息を切らしてギルドに戻ってきた。ちょうどそのとき、アクセルの元に緊急の知らせが騎士団経由で届いたところだった。その内容は、最近頻発している人売りの組織的な繋がりが見えてきたというものだ。どうやら連中は、攫った人々をすぐに他の街などに移送するわけではなく、一定期間街のどこかで匿い、ある程度の人数が集まったところでまとめて移送をしているらしい。なかなか手がかりを掴めなかったのには、こういう動きも関係していたようだ。

そして一番驚くべきことは、巡回中の騎士団員の何人かが港に停泊している不振な大型船を確認したというものだった。街の港に船が来る日は決まっている。そして今日は、その予定の日ではない。だとしたら、今そこに停泊している船は、一体何を運んでやってきたのか？あるいは、一体何を運ぶためにやってきたのか？

よじれた糸を正しく解くのに時間はかからなかった。その船こそが、攫われた人達を出荷するための道具に間違いない。

そこまで至ったアクセルの取った行動は速やかだった。すぐに騎

士団の内部に緊急の通達がされ、精鋭を含んだ少数の部隊が編成される。キリヤは半ば無理矢理、この任務に参加することになった。もちろんアクセルは参加を認めようとはしなかった。が、最後にはキリヤに根負けし、常に行動を共にするという条件付きで参加を認めた。

そして今、二人を含めた騎士団の部隊は船内にいた。部隊といっても、総勢はおよそ十二人の小数だ。大人数では他の乗客に紛れるのも難しいし、何より目立つ。相手は仮にも犯罪組織だ。その規模がどの程度のものかまでは把握し切れていないが、目立たないに越したことはない。

アクセル達を含む部隊のメンバーはそれぞれ二人一組に別れ、別行動で船内の様子を探り始める。

「……こいつら、全員船の客なのか？」

船内を歩きながら、キリヤはその乗客の多さに驚く。

「おそらくだが、ここの乗客のほとんどは別の都市を経由してここまできたんだろう。船の乗客としてではなく、人を買うための客としてな」

「っ……！」

キリヤは苛立ちを隠せなかった。それはというのも、乗客の誰も彼もが実に楽しそうに……普段の日常と何一つ変わらない様子で世間話を楽しんでいたからだ。これからこの船のどこかで、罪もない人が売り物として競に出されるといふにもかかわらず、だ。

「くそったれ……どいつもこいつも、何とも思わないのかよ……！」

「少しでもまともな神経をしている人間なら、こんな場所にはいないだろうさ。ここにいる客達は全部、普通に金で得ることのできる満足や快樂にはとくに飽きているんだ。だからこういう、表の世界ではお目にかかれない餌に食いつく。自分の中の欲求を満たした

いという、ただそれだけのためにな」

「……こんな、こんな……やつらに……」

キリヤは強く奥歯を噛み締めた。あいつが……ハクアが何をしたというのか。こんな所にまで墮とされてしまうようなことをしたというのか。

「あんな……あんな、ヤツが……」

ちよつと助けられたくらいで、人をヒーロー扱いしてしまうようなな。

「あいつが……」

名前を呼んでももらえたくらいで、バカみたいに喜んでしまうような。

「………ハクアが」

こっちの背中が見えなくなるくらいまで、ずっとその場で手を振り続けているような。

「……何を、したっていうんだよ……!」

立ち止まり、口に出さずにはいられなかった。あまりにも理不尽な目の前の現実。その理不尽が平然と見て見ぬふりをされている世界。そして何よりも、その世界の中で何も知らずにいた自分自身に、どうしようもなく腹が立つ。

「その怒りは取っておけ」

一歩前に行くアクセルが、振り返らずに背中越しに言う。

「まずはハクアを含め、運ばれた人達を助けるのが先決だ。後のことはそれから考えろ」

「……分かった」

キリヤは頷く。不本意ではあるが、それしか方法がないのも悔しいが事実だ。まずは、できることからやっていくしかない。

と、その時。

「……ん?」

「どうした？」

不意に立ち止まったキリヤに対し、アクセルが聞く。

「……今の、確か……」

キリヤは人ごみの向こうを眺めている。ここは船内の中でも特に広く造られた大広間で、客の数も特に多い。あちこちに白いテーブルクロスを広げた丸テーブルが置かれ、その上には料理や酒が所狭しと並べられていた。

が、そんなものはこの際どうでもいい。キリヤが今しがた、その目に見たのは

「……エルザード？」

昼間に知り合った修道院の神父の名を、キリヤは呟いていた。

「エルザード？ 誰だ、それは？」

「……………」

キリヤは答えない。今でも視線は人ごみの向こう側を見据えていて、自分が見たその人影が果たして現実のものなのか、それともただの気のせいだったのかを必死になって思い返している。

灰色の髪。一回り大きな背丈。縁のない眼鏡。そして何より、首から提げた銀の十字架。

「見間違いないんじゃない……！」

言うや否や、キリヤは人ごみの中を掻き分けて一目散に走り出す。
「お、おい！ 待てキリヤ！ 待つんだ！」

静止するアクセルの言葉も無視し、キリヤは人ごみの中を走る。頭の中がごちゃごちゃになっていた。聞きたいことが、知らせなくてはいけないことがあった。

しかし、それよりも何よりも、まずは。

「……何であんたが、こんな所にいるんだよ！」

そんなキリヤの思いを嘲笑うかのようにして、その時船の汽笛が船内にまで鳴り響いた。その音はまるで、奈落の底へ続く魔笛のよ

うな音色だった。

時刻は、日付が変わって二十五時。もう間もなく、この船は出港する。自分が考えてる以上に物語が悪い方向に流れ始めていたことに、キリヤはようやく気付き始めていた。

第六話 深夜の宴（4） 一赦されざる者一

見失った。とにもかくにも、船内の乗客があまりにも多すぎる。

「くそ、どこに……」

周囲を睨むように見渡すが、その中に先ほど見えたエルザードの姿はない。それどころか、この人ごみの中でアクセルともすっぴりはぐれてしまっていた。潜入捜査である手前、大声で名前を呼び合うわけにもいかない。

こうなったら、一人でやれるとこまでやるしかない。ひとまずはこの人ごみから離れるべく、キリヤは人と人の間を縫うように動いた。自分がどっちの方向に向かって進んでいるかなんてもはや分からなくなっていたが、それでもただ手をこまねいたまま、足を止めているよりはましだった。

くらげだらけの海を泳ぎ切るようにして、キリヤはようやく人の波から抜け出す。すると、そこはちょうど船の階段のある場所だった。

キリヤが今いるフロアは、甲板のある場所を地上一階とした場合の地下一階に当たる。目の前の階段はそれぞれ上下へと別れ、それぞれ上に向かえば甲板に繋がるラウンジへ、下に行けば機関室などのいわゆる関係者以外立入禁止の区域へと繋がっている。どちらがきな臭いかと聞かれれば、迷わず後者だった。

「……………」

船底へと通じる階段の手すりにつかまって、キリヤは静かに息をのむ。人々の喧騒の中ではあったが、静かに聞き耳を立てるようにすると階段の下の方へ向かう微かな足音のようなものを聞き取ることができた。それがエルザードのものであるという保障はどこにもない。というより、そうであってほしくないというのが正直な気持ちでもあった。

だが、どちらにせよこの状況では他に何も手がかりとなるものはない。ない以上、目に見える範囲で先に進むしかない。その先にあるであろう現実が、自分の望んでいないものであったとしても。

「待ってろ」

誰に言うわけでもなくそう告げると、キリヤは下へ続く階段を下り始めた。

カンカンと、靴底が金属の板を叩く音だけがこだまする。ずいぶんと下りてきたようにも思えるし、そうでないような感じもする。船底に近づくにつれて船全体の照明の数も減っていき、文字通り暗がりの中を手探りで進むような状況になってしまった。

先ほどまで聞こえていたわずかな足音も、今はすっかり聞こえなくなってしまった。代わりに耳の奥に届くのは、静か過ぎる空気が周囲の金属と擦れて共鳴でもしているかのような耳鳴りだった。

空気も冷え、見えない氷の服を肌の上から直接身につけているような感覚。それが寒気なのか、それとも怖気なのかは分からない。分からないが、前へ進むしかない。

やがて、長く短かった階段が終わる。そこに

「……扉？」

金属製の、見るからに頑丈で分厚そうな扉が姿を現した。

道はそこで途絶えており、つまるところ先の足音の主もこの扉の向こうへと入っていったことを示している。

細心の注意を払って、キリヤはその鉄のノブに手をかけ、静かにひねった。鍵はかかっている。そのまま静かに扉を押し開けていく。一気には開けず、少しずつ、少しずつだ。

どうにか人一人が入り込めそうだけの隙間を確保すると、キリヤはその隙間から滑り込むようにして部屋の中に入る。そして同じような動作で音を立てないように静かに扉を閉め、改めて正面に向き直った。

が、そこは暗闇の中だった。何も見えないというわけではないが、暗さに目が慣れるまでしばらくは時間がかかりそうだ。

ここが倉庫なのか機関室なのかは分からないが、闇の中で目を細めてみるとあちこちに四角形の箱のようなものの輪郭がぼんやりと浮かび上がってくる。そつとそれの一つに触れてみると、それはどうやら金属の箱か何かのようだった。触れた指先からは思わず身震いしそうな金属特有の冷たさが伝わってくる。そんな箱のようなの、どうやら部屋の中いっぱいに敷き詰められているようだった。

そうこうしているうちに少しずつ目が暗闇に慣れ、数メートル先の輪郭までぼんやりと浮かび上がるようになったところで

「……っ!？」

カチンという音と共に、部屋の中がいつせいに明るさを帯びた。誰かが電源を入れたのだろう、部屋の中の照明がいつせいに点り、暗闇の中にいたキリヤの目を潰すかのように光が注ぐ。

「く、そ……っ!」

ふいの光源ではあったが、しばらくして目も明るさに慣れてきた。何度かの瞬きを終えて、キリヤはすぐにその場で動かずに身構えた。理由は簡単だ。この部屋には、自分以外の誰かがいるのが明らかになったからだ。

しかし、部屋全体が明るさに包まれてもその誰かが姿を現す様子はなかった。だが、姿を見せていないだけでその誰かは確実にこの部屋の中にいる。キリヤはその気配を全身でひしひしと感じ取っていた。だから、あえて口に出す。

「……いるんだろ、出てこいよ。こそそと隠れる理由があるのか？」

金属だらけの部屋の中、決して大声ではないその言葉が四方の壁や天井、床に反射して共鳴する。

そして、そのこだまが鳴り止んだ頃

「おや、誰かと思えば……これは意外な客人ですね」

その誰かは、ようやく四角い鉄の箱の陰から姿を現した。カツンカツンと足音が響く。床の上に影が伸びて、シルエットが浮き彫りになっていく。そして、ようやく姿を現したのは……。

「キリヤさん、でしたか？ いやはや、一体どうしてあなたのような方がこんなところに？」

「……………どういふことだ。説明してもらうぞ。何であんたが、ここにいる？」

「おかしいですね。招待状を持たない者は、乗船の際に厳しく確認しているはずなのですが……」

「聞いているのはこっちだ！ 何で……何でお前がここにいるんだ！

答えろ……答えろよ！」

一度だけ奥歯を強く強く噛み締め、キリヤは怒鳴るように叫んだ。目の前の現実の、あまりの理不尽さに吼えた。

「————答えろ！ エルザード……！」

そこに立っているのは、紛れもなく修道院の神父であるエルザードだった。本人はまるで隠す気もないようで、衣装は夕方に遭ったときと全く同じままの修道服だった。

ただし、その体を包んでいる空気が明らかに変化していた。虫一匹殺さないような聖人の顔をしていて、しかしその縁のない眼鏡の奥にある眼光は比べ物にならないほど鋭く、冷徹さを帯びているように見える。

エルザードはキリヤの荒げた声など意にも介さず、それどころか余裕さえ思わせる笑みの中で軽く眼鏡を押し上げた。それだけの動作だったが、今のキリヤを煽り立てるには十分だった。

「何でお前が……ここにいる。あいつは、ハクアはどうした。数時間前から、姿が見えない」

両手の拳をはちきれんばかりに握り締め、キリヤは聞いた。だが、

その問いはすでに矛盾している。目の前のエルザードがハクアの失踪と無関係であるのなら、そもそもこんな問いを投げかける必要さえない。

だからそれは、否定してほしかった問いかけだ。知らない、分からないと答えてくれればまだ救われる。だが、もう遅い。投げかけた問いに、答えは簡単に返ってきた。

「そうですか。それはご迷惑をおかけしたようで、どうもすみません。ですが、心配は無用ですよ」

変わらぬ笑みを携えたまま、迷いなく答えるエルザード。それだけで大体の事情は飲み込めた。もっとも、分かっても理解なんてしたくもなかったが。

「ハクアのことなら大丈夫です」

「……何がだ」

聞き返すな。

「何の問題もないと、そう言っているのですよ」

「だから、何がだ……!」

その言葉を引き出すな。

心では確かにブレーキをかけているのに、現実には正反対だった。エルザードの口から出る言葉の一つ一つが、確実にキリヤの冷静さを削り取っていく。握り締めた拳も、噛み締めた奥歯も、もう限界だ。そして、引き鉄となる言葉が響く。

「……………だって、ほら。彼女はこうして……………こうして、ここにいますから」

言って、エルザードは自分の隣を指差した。今のキリヤの立ち位置からは、エルザードが指差した方向には鉄の箱が視界を遮っているせいで何も見えない。

「……………」

無言のままキリヤは歩く。足が鉛のように重い。鉄球の付いた足枷を引きずっているかのよう。

視界が開けていく。視界が開けていく。視界が開けていく。視界が開けていく。視界が開く。そこに

「……………っ!!!!」

探していた少女が、確かにいた。

——鉄の十字架に両腕を縛り付けられ、全身のあちこちに真新しい生傷と血の跡を刻んで座り込むハクアの姿が。

「ハ、ク……ア……?」

それはまるで、古い時代に行われた魔女狩のような光景だった。縛られた両腕はだらりと力なく垂れ、指先からは血の色が失せかけている。膝を折ったまま、両足はだらしなく投げ出されていた。白い衣服はあちこちが破れ、この鉄だらけの冷たい空間の中で肌が露出していた。何かで打ち付けられたような痣や、今なお血が止まらずに流れ続ける傷口さえある。

見ているこっちが痛くなってしまうほどの、むごたらしい仕打ち。これが、人のやることなのか。同じ赤い血が流れている、人間のすることなのか。

「ほら、彼女はここにいますでしょう?」

その声は、先ほどまでと何一つ変わらない声色だった。

「だから言ったじゃないですか。何の心配も要らないと、ね」

エルザードは心の底から微笑んでいた。何一つとして問題は起こっていないと言い切った。その言葉がキリヤの耳に届いていたかどうかは分からない。狂いそうになった時間の歯車の中で、それでもキリヤの耳が微かに捉えていたものは

「……………ご、め……………い。わた……………いで……………」

霞んでゆくような言葉。こんなぼろぼろの体になってまで、彼女は……ハクアは謝っていた。いや、それは謝罪ではない。ハクアはただ、自分自身を責め続けていた。何もできない自分を。何かを変えただけの力のない自分を、ただ悔やんでいた。

うわごとのように、ハクアはその言葉を繰り返す。誰のためでもなく、自分のためでもなく。贖いを求め続ける、羽の折れた天使のように。

「ごめん、なさい……私の、せいで……」

瞬間、キリヤの中で何か音が立てて切れた。頭が妙に冷える感覚。怒りを怒りのまま冷凍保存したかのよう。

「……………ねえ」

「はい？ 何でしょうか？」

小声すぎて聞き取れなかったその言葉に、エルザードは微笑みを崩さずに聞き返した。そして

「っ!？」

次の瞬間、エルザードは鉄の床の上を何度も転がっていた。

「が、は……っ!」

置かれていた鉄の箱に体を打ちつけ、ようやくその体の動きが止まる。口の中にうっすらと鉄の味が広がっていた。親指の腹で口の端を拭くと、そこに赤色があった。

「……赦さねえ」

響いたのは、たった一言。握り締めた拳を胸の前に、キリヤは低く、そして静かに告げた。

「————お前だけは、絶対に赦さねえ」

第七話 深夜の宴(5) 一君の声

「……ふん」

起き上がり、エルザードは鼻で笑った。片手で服の埃を払うように軽く撫で、口の端を伝う血を袖口で拭う。

「赦さない、ね。別に私は、過去の罪を懺悔しているわけではないのですがね」

床に落ちた眼鏡を拾い上げ、かけ直すエルザード。そんな様子を眺めながら、鋭いままの視線でキリヤが言う。

「眼鏡、外したほうがいいんじゃないか？」

「……それはまた、どうして？」

「失明する」

今度はキリヤがエルザードを煽り立てる番だった。遠回しにぶちのめしてやると言われているのだ。その言葉を受けてもエルザードは表情こそ笑みを崩さずにいたが、その目はすでに笑っていない。

「面白い冗談だ」

「すぐに分かる」

平静を装ったつもりが、二つ返事で切り返される。舐められていと嫌でも実感した。こんなガキに。

「……調子に乗るなよ、小僧」

「御託はいい。早くしろ。こっちは時間がもったいないんだ」

血管の数本くらいは千切れたかもしれない。エルザードはもはや会話を続けることにさえ苛立ちを覚え、懷から取り出した黒いナイフを手に握って真正面から襲い掛かってきた。

「こ、の……ガキがああああっ！」

手にしたナイフは黒曜石の刃を持つものだ。神父という身の上の都合で携帯していたのかどうかは知らないが、叫んだセリフにしてはお粗末過ぎる武器にも見える。とはいえ、材質が何であれ凶器は

凶器。切られれば肉は裂けるし血も吹き出す。だがそれも

「ぐ、ふ……っ!？」

「遅えよ」

素人の手によるバカ正直な動きであれば、避けるにまるで値しない。

カウンターの要領で、キリヤの蹴りがエルザードの腹に食い込む。人体急所の一つのみぞおちだ。もしかしたら多少は狙いがずれているかもしれないが、それならそれで肋骨の数本が碎けるかひび割れることになっているのでどちらでも構わない。

「げほっ！ お、え……げええ……っ！」

エルザードはその場に跪くように倒れ込むと、蹴られた腹を押さえながら胃の中のものを片っ端から吐き出していた。詳しく分析すれば今夜何を食べたのかくらいは分かりそうなものだったが、そもそも目の前の下衆野郎の食生活なんてこれっぽっちも興味はない。考えただけでこちらがづられて吐き気を覚えてしまいたいになる。

「素人以下だな。武器を持てば自分が強くなれるとでも思ったのか」
今なお咳き込みながら胃の中のものを逆流させ続けるエルザードを上から見下ろし、キリヤは目の色を変えずに続ける。そこには哀れみも同情もない。あるのは怒りと、蔑みの色だけだ。

「立てよ。まさかこれで終わってんじゃないだろ」

「あ……ぐ、げほっ、げほ……あ」

聞き終えるより早くキリヤはもう一度蹴りを放った。エルザードの顎を、つま先で勢いよく蹴り上げた。前屈みになっていた上半身が百八十度向きを変え、今度は仰向けの姿勢になって倒れていく。カランカランと乾いた音がした。よく見ると、白い破片がいくつかがその辺に転がっている。おそらくは今の蹴りで折れたエルザードの前歯か何だろうが、キリヤは別に気にも留めなかった。これくらいで相手の体を気遣うほど、内に秘めた怒りは冷めていない。

「がっ、あああああっ！ あぐ、ぎ、あああああっ！」

悲鳴というよりも絶叫に近い何かが響いた。片手で腹を、片手で顎を押さえたまま、エルザードは鉄の床の上を無様にのた打ち回っていた。口の両端から、血と胃液とその他何かが交じり合った何だか分からない液体が溢れ、床の上を転がるたびに飛び散った。

そこにもう、修道服の似合う優しい神父の面影はなかった。正しくはキリヤがそうでなくしたと言い換えるべきだが。

「……………だよ」

苦痛に悶え続けるエルザードを前に、キリヤはわずかに震える声で呟いた。

「何で、お前らは……こんな、こんなことが平気でできるんだ」

「が、あう…………う、ぎ…………があああっ…………！」

聞いたところでまともな返事が返ってくるはずがなかった。それがさらにいっそう、行き場のないキリヤの怒りを後押しした。

「何でだっ！ 答えろよっ！！！」

ガゴンと音が響く。それはキリヤがエルザードを殴りつけた音ではない。キリヤが殴りつけたのは、隣にある鉄でできた箱の表面だった。当然、生身の拳の一撃くらいでは鉄の箱は変形さえない。それどころか、反動でキリヤの拳の皮膚が少し裂け、指と指の間を生暖かい血が流れては落ちていく。

不思議と痛みはない。今いるこの場所が冷え切っていて、感覚が鈍くなっているからなのかもしれない。けどそれは、違う。きつと、違う。

「…………何でだ。何でなんだよおおおっ！！！」

キリヤは叫んだ。叫び声は四方の壁、床や天井に反響して自分の耳が痛くなるほどに響き渡った。理解ができない。同じ人間なのに、どうしてここまで違ってしまうのか。どうしてこんな風になってしまったのか。どれだけ考えても、この場で答えは出そうになかった。それがただ、悔しくて。どうしようもなく、やるせなくて。

「……っ！」

キリヤはただ、両手を床にぶつけることしかできなかった。そしてそんな姿を、今更になって笑い飛ばす声にする。

「は、ははは……ひははは………」

見ると、仰向けに倒れたままのエルザードが血まみれの顔で笑っていた。だが、今はもうその耳障りな笑い声に怒りさえ覚えられない。キリヤの胸の中はとつくに冷え切っていた。これ以上痛みを与えてやろうという気にもならなかった。

「ひひ……青いんだよ、ガキが。この世界が、お前の思うような幸せに満ち溢れた世界だとしても、思ってたのか？」

おそらくはそれがエルザードにできる最後の抵抗なのだろう。

あまりにも青臭すぎる理想を抱いた少年の心を、言葉の刃でずたずたにしてやろうという、惨めを通り越した哀れな抵抗。

「バカが。そんな理想が形になってれば、誰が戦争なんておっぱじめるもんか。人も動物も、国も世界も、結局は同じなんだよ。喰うか喰われるかだ。弱者は常に強者の糧になるしかないんだよ。そうやって繰り返してきたんだ。俺達も、歴史だってそうだ」

下衆笑いを絡め、エルザードは続ける。

「自分の立ち位置を確かなものにするには、常に勝ち続けていくしかねえのさ。この世界は血と泥にまみれてる。背中を見せれば切られるし、見せられたら切りたくなる。甘っちょろい戯言で何かを変えられるほど、簡単な話じゃねえんだよ」

「……違う」

「違わねえさ」

「違う……違う！」

「認めちまえ！　そして絶望しろ！　この世界、居場所のない人間なんて吐いて捨てるほどいるんだよ……！」

「……………そんなこと……ありま、せん………」

答えたのはキリヤではなかった。その声に、キリヤはゆっくりと後ろを振り返る。そこに

「……そんなこと、ないです……」

ハクアがうつすらと目を開けていた。意識は戻っているようだが、呼吸がひどく浅い。吐く息は驚くほどに白く、その体が冷え切って衰弱していることを示していた。

「ハクア！」

名を呼び、キリヤはすぐに駆け寄る。エルザードを殴り飛ばしたときに転がった黒曜石のナイフで両腕を縛る縄を切り、同様に足首を縛る縄も切った。

ようやく全身が開放されたハクアだが、縄で縛られていた部分は青くうっ血し始めている。肩に触れると、寒気を覚えるほどにその体は凍てついていた。一刻も早く医者に見せる必要がある。

「待ってろ。すぐに医者に見せてやるからな」

「は、ははは……はははははは！」

そこでエルザードは高らかに笑った。相変わらず起き上がるどころか手足すらまともに動けない体勢にもかかわらずだ。

「無駄だ。気付いてないようだが、この船はすでに港を離れて出港してるんだぜ？」

「っ！」

その言葉でキリヤは思い出した。ここにくる階段を下る前に、汽笛の音を聞いたことを。あれが出港前の合図だとしたら、確かに船はとっくに出港しておかしくない。いや、むしろ港に留まっていることのほうが不自然だ。

「く……！」

「ひははは！ どうだ、分かったか！？ お前の語る理想論なんて、所詮これっぽっちのものなんだよ！ 思い知れ。打ちひしがれる。自分の腕の中でそいつが息絶える瞬間を目の当たりにしやがれ！」

エルザードは愉快そうに叫んだ。まるでこれが、せめてものの復讐だと言わんばかりに。だが、それも別の意味で幻想であることを、エルザードは知ることになる。

「……盛り上がっているところ悪いが」

その声は、この部屋の入り口から聞こえてきた。キリヤとエルザードの視線が揃って同じ方を向く。そこにいたのは

「船は今も港に停泊したままだ。医者ももう、港で待機済みだ」

アクセルを含む、この任務に同行した騎士達だった。

「な……………」

「アクセル！」

その言葉に、それぞれの感情を表にするキリヤとエルザード。片方は希望。そしてもう片方が、さんざん言い続けてきた絶望というやつなのだろう。

「神父の方は任せる」

「ああ、任せておけ」

アクセルは仲間の騎士と二言三言交わすと、真っ直ぐにキリヤとハクアの元へとやってきた。

「全くお前は、この任務に参加させるための条件をあっさりと破り捨てやがって」

「……悪かったよ。でも、俺……」

「ああ、分かっている。だがまずは、ハクアを医者に見せないとな。命に別状はないようだが、放っておいたら危険だ。運べるか？」

「え？」

「どうなんだ？」

「……大丈夫。俺が、運ぶ」

「よし」

それだけの言葉を交わし、キリヤはハクアを背負って立ち上がる。そのために、ここまで来たのだから。

「キリ、ヤ……君？」

「いいから、お前は少し寝てろ。それと……呼び方、また戻ってるぞ」

「あ……」

「……ちゃんと運んでやる。だから、安心して眠ってろ」

「……うん。ありがとう、キリヤ……」

礼を言うのはこっちの方だと、キリヤは声に出さずに胸の内で呟いた。だから今は、ゆっくりと休んでほしい。

——目が覚めたら、届けたい言葉があるから。

第八話 雨上がりの人々

目が覚めると、そこはまた同じ場所だった。

「……………」

「気が付いたか？」

一つ違ったのは、横には見知った少年の顔があったということだ。キリヤはベッドの横で椅子に腰掛け、ゆっくりと目覚めたハクアに声をかける。

「体はどうだ？ まだ痛むか？」

「……………ん。まだちょっと、うまく動けないかも……………」

小さく言ってハクアは笑う。が、その表情はまだどこか痛々しいものが残っている。布団に隠れて見えないでいるが、ハクアの体はあちこちが傷だらけだった。幸い命の危機に繋がるような深刻なものではなかったが、それでも体中の至るところに包帯を巻かなくては、その傷跡を隠せないでいる。

「っ、痛……………」

「っ、バカ。まだ無理すんな」

それでも半ば強引に起き上がろうとするハクアの両肩を軽く制し、そのままもう一度ベッドの中へと押していく。とてもじゃないが、まだ二本の足で満足に歩くことさえできる状態ではない。

「あ、はは……………ごめんね」

「……………何でお前が謝るんだよ。いいから、おとなしく寝とけ」

「……………うん。ごめん、ね……………」

「……………謝るなよ。頼むからさ……………」

あれから二日が過ぎていた。

船内でエルザードを含めた一定数の犯罪者達を捕らえることもでき、彼らの言うパーティーを未然に防ぐことができたので、とりあえず任務の上では成功と言えるだろう。

だが、その代償はあまりにも大きかった。少なくとも、キリヤにとっては大きなものであってしまった。その結果が、今こうして目の前にいるハクアの姿だったのだから。

アクセルの言葉を借りるなら、事情はどうあれハクアを救ったことに変わりはない。無傷というわけにはいかなかったが、それでも最悪の事態だけは免れたのだから、今はそれを素直に喜ぶべきなのかもしれない。だが、それでも

「……………」

言葉には出さず、キリヤは思う。確かに目の前にいるハクアは、傷だらけではあるがこうして呼吸をし、生きている。結果としてそれは助けられたという一言で表現できるものかもしれない。分かっているのだ。ただ、納得できていないだけ。今だって鮮明に思い出せる。あの船の中で、ハクアを見つけたときのこと。そのときのハクアの姿を。とてもじゃないが、良かったの一言で済ませられるわけがない。

「……………少し、聞いてもいいかな?」

「……ん、どうした?」

「神父様は、どうなったの?」

「……エルザードは、騎士団の管轄で拘束中だ。数日もしないうちに王都に移送して、そこで正式に罪を裁かれる。どう間違ったって、極刑か終身刑は免れないだろうな」

「……そう、なんだ」

一言だけ返したハクアの声は、どこか悲しげだった。あんなことがあったというのに、それでも他人の身の上を心配してしまうのはやはり優しさのせいなのだろうか。いや、他人ではないからだだろう。こんな結末にこそなってしまったものの、やはり何年という長い年月を共に過ごし、少なからず尊敬もし、もしかしたら父親にも近い感情を寄せていたかもしれない人。その人が罪を犯し、これから裁かれると知ったら、誰だってこんな風になるのかもしれない。もっ

とも、その気持ちはキリヤには理解できないものではあるのだが。

「……私、ね」

「ん？」

「……私、両親がいないの。お母さんは私が小さい頃に病気で死んじゃった。お父さんは私が生まれる少し前に事故で死んじゃったらしくて、写真でしか顔を知らないの。他に身寄りもいなくて、お母さんが死んじゃってすぐ、私は孤児院に預けられたの。その私を引き取って育ててくれたのが、神父様だった」

「……………」

「七歳の頃、だったと思う。私が神父様に引き取られて、今の修道院にやってきたのは。最初は全然人と話せなくて、部屋の中に閉じこもってばかりだった。私、お母さん以外の人とあんまり話したことなかったし、特に男の人はちよつと怖いイメージがあつて、友達もいなかったから」

「……そっか」

「それでも何とか、普通の生活には少しずつ慣れていった。お母さんがいなかったのは寂しかったけど、寮のシスター達もみんな良い人で、引っ込み思案な私にも優しくしてくれた。中でも一番仲良くなったのが、エリーナさん。昔はよく、一緒にいたずらしたりして、揃って神父様に怒られたりもしたんだ。エリーナさん、ああ見えて結構お転婆でね。大体、エリーナさんの悪巧みに私が巻き込まれて、一緒に叱られちゃうんだけど」

「……うん」

「……神父様、ってね。普段はすごく物静かで、誰にでも優しい人なんだ。でも、起こるときはちゃんと怒ってくれるの。一生懸命、怒ってくれたんだ。私も、何度怒られたか……あはは、数え切れなくて、覚えてないや……」

「うん」

「……………本当、に……………優しい、人、で……………いっぱい、怒られたけど……………同じくらいいっぱい、優しく……………優しく、してくれ、て……………」

「……………」

「笑った、時の……………顔が、写真で見たお父さんと、少し似てて……………血も、繋がってないけど……………本当の、ほん、とうの……………」
ぼろぼろと、隠すこともなく大粒の涙が零れ落ちていた。拭っても拭っても、透明な雫はあとからあとから溢れ出てくる。痛みもある。苦しみもある。悲しみもある。だけどそれ以上に、沢山の思い出が胸の中にあつた。無理に抑え込もうとするたびに、あの日の景色が頭に浮かんでは消えていく。

「——本当の、お父さんみたいに、思ってたのに……………家族だって、ずっと、思ってたのに……………！」

最後の方はもう、半ば叫び声のようになっていた。ハクアは痛みが残る腕で必死に目元を覆い隠しながら、それでも溢れる涙は留まることを知らなかった。ぐちゃぐちゃになっていく。どこからどこまでが本当で、どこからどこまでが夢だったのか。

「……………痛いよ」

「……………」

「痛いよ、キリヤ……………」

「……………」

「傷のせいじゃないの。こんなの、いくらでもがまんできるよ。でも、違うの。忘れようとするたびに、思い出しちゃう。全部、忘れちゃえばいいって分かってるのに……………痛いよ。苦しいよ。辛いよ。悲しいよ。寂しいよ。どうして……………こんなに……………！」

「……………分かってる。分かってるから」

そっと、キリヤはハクアの手を握る。包帯が巻かれた、まだ痛々しい手だ。それでも、少しだけ強く握った。ここにいることを示す

ために。一人ではないことを、証明するために。

「————お前は、ここにいる。俺だって、ここにいる。だから、もうお前は、一人じゃない」

「……っ、う……うああああ………っ！」

ハクアは泣き崩れた。胸の内側にたまっていた不安が、膨らみきった風船のように破裂したかのようだった。忘れたくないという思いと、忘れなければいけないという思い。どちらが欠けても、きつとのこ先の日々を自分の足で歩いていくことなんてできない。どれだけの痛みがその体に残っても、昨日までの記憶を書き換えることなんてできっこない。今日まで歩んできた日々を、否定することなんてできない。矛盾だらけの頭の中はぐちゃぐちゃになって、思い出だけが通り過ぎていく。だから、涙は溢れてくるんだろう。泣けない心の代わりに、泣いてあげているんだろう。新しい明日を歩き出すための最初の一步を、力強く踏み出せるようにと。そっと、背中を押してやっているんだろう。

それからさらに一週間が過ぎた。

「本当にもう大丈夫なの？　もっとゆっくり休んでいいのよ？」

「いえ、大丈夫です。もうすっかり歩けるようにもなりましたから」
玄関先でのハクアとリノのやりとりだ。この一週間でハクアの体の具合もほぼ回復し、体中のあちこちにあった包帯もほとんどが取れている。

「遠慮なんてなくていいのに」

「そうだよ。ハクアちゃんがいなくなっちゃったら、うちのギルドの貴重な女の子成分が激減し」

そこまで言いかけたところで、リノとメルフィネの二人が揃ってアルフレッドを撃退した。けっこう鈍い音がした気もするが、まあ命に別状はないだろう。

「まあ、君が自分で決めたことなら俺は黙って見送らせてもらうさ。ただ、今後のことは考えているのか？ 修道院の方は、まだ色々問題も残っているだろう？」

「はい。でも、とりあえずは一度戻らないと。エリーナさん達にも、いっぱい心配かけちゃったから……」

「……分かった。ただ、何かあったら、遠慮なくすぐに俺たちを頼ってもらって構わない。くれぐれも無理はしないようにね」

「はい。色々とお世話になりました」

小さく頭を下げ、ハクアは言った。

「それじゃ、失礼します」

玄関の扉を押し開ける。最後にもう一度振り返り、頭を下げた。アクセル達は、揃って笑顔でその旅立ちの瞬間を見送った。ただ一人を除いて。

久しぶりの街並みだった。が、あいにくと天気は下り気味で、頭上には灰色の空が広がっている。もしかしたら一雨くるかもしれない。ハクアはとりあえず道なりに歩くことにする。

「何か、懐かしい。ほんの数日のはずなのに」

目に映る景色は特別なものではない。いつもと同じ、賑わいを見せる通り。行きかう人々と、商人達の掛け声。すれ違う人の足音や、微かに香る春の風の匂い。毎日のようにすぐ隣にあった何もかもが、今は不思議と新鮮さを感じさせた。

ハクアは人通りの多い中央通を歩く。昼前のこの時間も、やはり人の数は多かった。賑やかな人の波をゆっくりと抜け、少しずつ前へと歩き出す。と、そこで

「……雨？」

ぽつりと頬を打つ雨粒に、ハクアは空を見上げる。灰色の空は一

面に広がり、天空からいくつもの雫が降り始めたところだった。道行く人々も雨に気付いたのだろう、早足で通りから離れたり、家路へと急ぐ姿が見て取れる。露天商人達は軒先へと品物を引っ込め、屋根の下でそのまま商売を続けていた。さすが商売人、雨ぐらいじやへこたれない。

「どうしよう。修道院まで走っても、絶対ずぶぬれになっちゃうし……」

わずかに迷ったが、ハクアは手近にある軒先の下に避難することにした。いつ止むかも分からない雨ではあるが、雨の中をずぶぬれで走って風邪を引いてしまうよりはいい。屋根のある場所であれば様子を見ることにする。

だが、しばらくしても雨脚は弱まることはなかった。むしろ強くなっている。あちこちに水溜りができ始めると、さすがの露店商人達も商売にならないと判断したのだろう。各々に店じまいの支度を見せ、荷物をまとめて家の中へと戻っていく。ハクアと同じように軒先に身を隠す人も少なくはなかったが、その中の何人かは意を決して雨の中へと飛び込んでいく姿もあった。なかなか雨脚が弱まらないので、業を煮やしたのだろう。

「……なかなか止まないな」

曇った空を見上げながらハクアは呟く。雨のせいかな、気温も少しずつ冷え込んできたような気がする。さつきからわずかに身震いを繰り返しているのはそのせいかもしれない。

「……そういえば。キリヤ、どこに行ってたんだろ？」

ふと思ひ出す。今しがた別れてきたとき、そこにキリヤの姿はなかった。リノに聞いた話だと、どうやら朝から姿が見えていないとのことだったが、理由は分からない。

「ちゃんと、挨拶しておきたかったんだけどなあ……」

「……何がだ？」

「え？」

その声にふと隣を見てみると、どういいうわけかそこに当人のキリヤが立っていた。

「うわあ!？」

「何だよ。人をバケモノみたいに……」

思わず大声を出して驚くハクアに、キリヤは少しむくれた表情で言葉を返す。が、その表情よりも何もよりも目立ったのはキリヤの体だ。

「……キリヤ、ずぶぬれじゃない？」

「そりゃな。雨だから」

頭の上からつま先まで、雨に打たれていないところがないくらいにキリヤはずぶぬれだった。前髪を伝って雨粒がぼたぼたと落ちているし、服も水分を吸って色が変わり、見るだけでずいぶん重苦しそうだ。

「風邪引いちゃうよ」

「平気だ、これくらい」

「だめだよ。あ、ちょっとそのままじっとしててね」

「何でだよ……って、おい！ バカ、何すんだ！」

「いいから。ほら」

「むぐ……」

ハクアは荷物の中から白いタオルを取り出すと、それでキリヤの頭の水気をふき取っていく。抵抗こそしたものの、思ったよりもハクアが躊躇なしに体を密着させてくるので下手に暴れたら大変なことになる。そう悟ったキリヤは、不本意ではあるが黙って頭を拭かれるのだった。

「……よし。これで少しは大丈夫かな」

「……ったく、お節介なやつ」

「でも、何でこんな雨の中走ってたの？ 朝からギルドにもいなかったって、リノさんが言ってたけど」

「……別に。ちょっと、野暮用」

「ふーん……」

「……何だよ？」

「ううん。何でもない」

「……………」

そこで一度会話が途切れ、二人の視線は雨が振り続ける景色へと移る。相変わらずさっぱり止む気配を見せない雨だ。目の前の通りにはすっかり人の姿はなくなっていた。こうして軒先の下で雨が止むのを待っているのも、いつの間にか二人だけになっていた。

「……お前さ」

「うん？」

「その……これから、どうすんだ？ エルザードがあんなことになっちまって、修道院の方もまだ色々と混乱が収まってないんだろ？」

「……うん。しばらくは閉鎖になるだろうって、アクセルさんから聞いた」

「じゃあ、どうすんだよ」

「……分からない。私、あそこしか行く場所、ないから」

「……………」

ハクアの表情がわずかに沈む。分かっていたこととはいえ、聞いてはいけなかったことなのかもしれない。だが、今のまま修道院の寮に戻っても、何かが変わるとは思えない。それはキリヤもそう思っているし、他でもないハクア自身もうすうすと気付いていることではあった。

「……なあ。俺達のギルド、何て名前か誰かから聞いたりしたか？」

「え……ううん。聞いてないよ」

「そっか……」

「……それが、どうかしたの？」

「……………」

キリヤは一瞬だけ迷った。が、その迷いをすぐに振り払った。そ

れが正しい道かどうかは分からない。決めるのはハクアだ。でも、言葉にしたかった。言葉にしなければ、きっとどんな思いも届かない。どんな奇跡も起こらない。どんな祈りも届かない。そう、思えたから。

「――来いよ。俺達のギルドに」

「え……………」

当然のように、ハクアは呆然としていた。口は小さく開いたまま、今何を言われたのかをしっかりと理解できてないようにも見える。というか、唐突過ぎて全く理解していない。

「……いや、その……嫌だってんなら、無理にとは言わない。ただ、もしお前が嫌じゃないなら……」

「……………」

「一緒に暮らさないかって……って、今のはリノやアクセル達の言葉だからな!? ま、まあ、俺も含めてギルドの全員の意見でもある……けど……っておい、聞いているのか?」

「……あ、ごめん。その、いきなりだったから、その……びっくりして」

「いや……勝手に話進めて、俺も悪かった。けど、今の話は嘘じゃない。皆で話して、そういう選択肢もあるんじゃないかってなったんだ」

「でも、私……」

「……俺も、お前と同じ孤児だ」

「……え?」

悩むハクアに、キリヤは唐突過ぎる言葉を投げる。

「親父は戦争で、母さんは病気で死にしまった。母さんは戦争から逃げながら必死に俺を育ててくれたけど、無理がたたって体を壊して、それっきりだ。戦争が終わって、俺は孤児として施設に引き取

られた。まあ、その後色々あって今はこうしてるけどな」

「そう、だったんだ……」

「……別に、だからってのが理由じゃない。けど、うちのギルドのやつらは、そんな俺にちゃんと真正面から向き合ってくれた。生まれとか育ちとか、そういうの全部まとめて俺を受け入れてくれた。アクセルはくそがつくくらい真面目で堅物だし、リノは口うるさいし、アルは何考えてるかさっぱりわかんないし、メルフィネは人の飯まで食うし、ユーグはエロい」

「……う、うん……？」

最後の一言にややハクアが引くが、構わずキリヤは言葉が続けた。
「それでもあいつら、俺のことを特別扱いなんてしない。普通に接してくれる。全部失くして空っぽだった俺に、新しい道を示してくれた。だから……」

「……………」

「だから……お前も、きつとまた歩いていける。信じる。俺だってできたんだ。お前にだって……ハクアにだって、絶対にできる。それでも、どうしても歩くのが辛くなった、そのときは……」

一度だけ深呼吸。目を閉じ、そして開く。真っ直ぐに視線の先のハクアを見て、キリヤは言う。

「……………」そのときは、俺が手を貸してやる。俺達が、お前を支えてやるから。だから……」

「……………うん」

その先の言葉は、言われなくても分かった。分かってしまった。だって、目の前の少年はこんなにも真剣な眼差しで語りかけてくれる。その瞳の色に、嘘はない。信じられると、心がそう叫んでいた。

「あ、そうだ。キリヤ」

「何だ？」

「二つ聞いていい？」

「だから、何だよ？」

「さっき言ってた、ギルドの名前って結局何だったの？」

「ああ、それか。それなら……」

言いかけて、キリヤはドアを開ける。

二人は戻ってきた。

これから始めるための、屋根のある場所へ。

「「「「「ギルド、【雨宿り】へようこそ」「」「」「」

扉の向こう、新しい家族を招き入れた六人が揃って声を上げた。

第八話 雨上がりの人々（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
作者の h a r u k a n a と言います。

ひとまずこれでプロローグ的な部分がおしまいとなります。

本編はこれからゆっくりと時間を書け、格キヤクターのエピソードなどを織り交ぜつつ軸となる長編のストーリーに移っていきたいと思っています。

具体的な流れはまだ決定してはいませんが、そこは追々うまくやっていければと考えています。

まずはここまでお付き合いくださってありがとうございます。

もしもこの作品が気に入っていただけたのであれば、今後もまた暇なときに目を通してやってください。

感想、質問、評価などなど、お気軽にどうぞ。

自分でも気をつけるようにしますが、誤字などの指摘もあればひお願いします。

それでは、今回はこれで。

第九話 王都へ（前書き）

第一章を読んでいただきありがとうございます。

今回が第二章部分の冒頭部となります。

気に入っていただけたら、ぜひお付き合ってください。

第九話 王都へ

潮の匂いがする。風は穏やかで、空は青く澄み渡っている。力強く帆を揚げて走る船と併走するように、数匹のカモメが空を泳いでいた。

「わぁ……」

甲板の先頭部分、ほとんど船のへさきに近い場所でハクアは感嘆するように声を上げた。吹き付ける風を全身で受け、香る潮風に鼻腔をくすぐられ、暖かな日差しを浴びて静かに目を閉じた。

「気持ちいい……」

「……気持ち悪い……」

雰囲気もへったくれもあつたもんじゃない言葉が聞こえた。見ると、ハクアの立つすぐ隣ではキリヤが顔を真っ青にして壁に背中を預けていた。目にはまるで生気が感じられないし、手足もだらしく船体の上へと投げ出している。要するに、酔っていた。

「まったく、相変わらずお前は船酔いには弱いな。馬や馬車じゃ全然酔わないくせに」

そういつて呆れた様子で声をかけたのはアクセルだ。見た目にもやや重量感のある騎士の鎧に身を包み、腕にはガントレット、足にはグリーブと呼ばれる金属製の防具が付けられている。が、当のアクセルはそれを重荷に感じている様子はない。普段どおりに歩き回っている。もしかしたら素材もただの金属ではなく、軽くて耐久性の高い物を使うなどして工夫がなされているのかもしれない。

「ほら、しっかりしろ。もう少しで王都に到着だぞ」

「……う、げえ……。だから、俺は陸路を行こうって……言っただ……」

「あほか。北周りのルートで王都へ向かうものなら、馬を使っても丸一日近くかかるんだぞ。その点、船なら直進距離でたったの三

時間だ。時間的にも経済的にも船の方が効率がいい」

「俺は、気分がよくない……おえっぷ」

「やれやれ……」

今に始まったことじゃないけどなと付け足して、アクセルは溜め息を吐き出す。そんな様子を怪訝そうに伺っていたハクアも会話に参加する。

「キリヤ、船だと酔っちゃうの？」

「ああ。コイツは昔から、どういうわけか船だけが苦手だね。時々こうして王都まで行くこともあったんだが、毎回のようにこの調子だ。まあ、変に落ち着きがないよりはましなんだが……」

「う、うるせー……人を、暴れ馬みたいに、言うんじゃ……おえええ……」

「………えっと、確か」

そんなことを呟くなり、ハクアはその場に膝を折ってキリヤの手を取る。普段のキリヤならすぐに手を引っ込めてしまうところだが、船酔いでつぶれているこの状態ではそんな余力も残っていない。

「な、何……すんだ？」

「手のひらのつぼを押すと、少しは気分が良くなるって聞いたことがあるの」

言いながらハクアはキリヤの手のひらのあちこちをぐいぐいと押していく。あちこちという時点で、ハクアにもそのつぼとやらが正確にはどの辺にあるのかは分かっていない。要するに適当なわけだが、一応効果はあったようで。

「………」

「どう？」

「……分かんねえ。分かんねえけど………少し、楽になった………気がする」

「うん。なら、良かった」

「……ずいぶんと世話のかかる騎士だな」

そんな会話をしていると、船の汽笛が響き渡った。アクセル達以外の乗客も、その音につられて各々の会話が一度中断する。

「間もなく王都、セイムブルグへ到着します。船を下りる方は荷物など、忘れ物のないようお願いします。繰り返します。間もなく……」

「つと。どうやらそろそろみたいだな」

「……ようやく、開放される、のか……」

「王都かぁ。どんなところだろ。私、初めてだからすごく楽しみです」

「まぁ、特別どうというわけではないさ。城へ行く途中、色々と案内しよう」

「はい」

「うう……岸は、まだ……か……」

三人がこうして船で王都へと渡ったのにはそれぞれ理由がある。

アクセルとキリヤの二人は、先日の人売りの事件に関しての報告と聴取をするためだ。その旨が記載された手紙が届いたのは、昨日のことになる。本来ならばここにハクアが同行する理由はなかったのだが

「私、王都にはまだ行ったことがなんです。それどころか、この街から一步も外へ出たこともないかも……」

というハクアに、外の世界を見て認識を広めるのも一つの経験になるという答えが出され、今回の呼び出しに同行することになった。もともと、城内には騎士団関係者が王族、もしくはそれに仕える者しか立入を許可されていないので、二人が城で要件を済ませる間は別行動となってしまうのだが。

その旨を伝えた上で、ハクア自身も行ってみたいということだったので、こうして三人はちょっとした船旅を終えてここまでやって

きた。王都、セイムブルグへと。

王都セイムブルグ。

アトラクア大陸の西の端に位置する大都市だ。東には海を挟んでキリヤ達の暮らす街、ジェリオの街があり、海路と陸路の両方で行き来が可能。陸路を通る場合は大きく北を迂回する必要があるのが、よほどの理由か物好きでない限りは海路が主な交通手段となる。が、年に数回海の荒れる次期が長く続くことがあり、その時期だけはこの遠回りな陸路も旅人の姿でにわかに賑わいを見せることもある。

王都には国を治める王、クリストフ・ウィル・リリアネス……八代目クリストフ王が構える王城の他、騎士団の本拠地でもあるリリアネス騎士団総本部、多くの聖職者達が集う聖リリアネス大聖堂、各地に点在するギルドを管理するギルド管理局の本部などが所狭しと揃っている。

船を下りた三人は、とりあえずキリヤがまともに二本の足で歩けるようになったのを確認してから歩を進めた。王都ともなれば、行き交う人の多さだけで逆に眩暈を起こしてしまいそうになる。

「すごい人の数ですね……」

「仮にも西大陸最大の王都だからな。大陸の西の端であるこの街に、道は大きく南北へ分かれているんだ。北は東に寄っていけば俺達の住むジェリオの街へ。真っ直ぐ北に進めば北大陸との国境に続いている。南には砂塵地帯が広がっているが、途中に砂漠の街と呼ばれるコゼットがある。主に、砂漠に行く人々の中継地点になっている街だ。それほど大きくはないが、旅人には必要不可欠な街だから意外と人が多い」

「詳しいんですね、アクセルさん」

「騎士団の遠征で、大陸は一通り見て廻ったよ。もう昔のことだけだね」

「俺もそのうち、参加することになるのか？」

「無事に騎士の昇級試験に受かったらな。まあ、今のお前にはいらない心配だろうがな……」

「ふん。見てろよ、すぐに試験に受かって、見習いなんか卒業してやる」

「……まあ、そういう意味じゃないんだがな」

「え？」

そのアクセルの呟きはどうかやんちゃには聞こえておらず、代わりに耳で拾ったのはハクアの方だった。どういう意味かは分からないが、その言葉を口にしたときのアクセルの表情は少しだけ悲しそうに、辛そうに見えた気がした。気がしただけだから、もちろん気のせいなのかもしれない。

しばらく歩くと、いよいよ目の前に城の巨大な城門が見えてきた。とにかくでかい。高さだけでゆうに二十メートル以上ありそうだが、がっしりとした岩の壁が聳え立ち、入り口はまるで巨大な化け物が口を開けているかのように見える。その城門の真下は橋になっている。橋の下はこれまた高さが五メートル以上はありそうな深い濠になっており、その下は用水路なのだろうか、水の道が張り巡らされているようだ。

三人が橋の上を渡り終わるところで、城門前に立っていた屈強な鎧に身をまとった二人の兵士のうち、一人が動いた。がしやがしやと音を立てる鎧は本当に重苦しそうだ。

「止まれ。許可証の類は持っているのか？」

「ああ、ここにある。騎士団長、グレン殿からの呼び出しでやってきた」

アクセルが懐から手紙を取り出し、城門の兵士へと手渡す。内容に一通り目を通した兵士は、目配せでもう一人の兵士へと視線を投げると互いに無言で一つだけ頷いた。

「失礼しました。ジェリオの街の遊撃騎士、アクセル殿でお間違いないですね？」

「そうです」

「グレン騎士団長よりお話は伺っています。今の時間だと、おそらく中庭の辺りにいらっしゃると思いますので、まずはそちらをお尋ねください」

「分かりました。お勤めご苦労様です」

アクセルの返事を聞くと、城門の兵士二人は揃ってそれぞれの拳を右胸の前にかざした。これがリリアネス騎士団の騎士達の間の挨拶のようなものだ。

「よし。行くぞキリヤ、付いて来い」

「そりゃいいけどさ。ハクアはどうするんだ？」

「できることなら一緒に行動をしたいが、今回呼ばれたのは俺とお前だけだ。残念だがハクアは城内に入ることはできないな。出発前にも言ったように、どこかで時間を潰してもらうことになるが……」

「つつても、なあ……」

キリヤとアクセルは揃って街並みを見渡す。王都の治安は比較的安全だが、さすがに人が多すぎる。右も左も分からない街では、あっさり迷子になってしまう可能性も少なくない。とはいえ、いつ終わるかも分からない用件が終わるまでここで待たせておくわけにもいかないだろう。

「あの……私だったら、大丈夫です。ちょうど、大聖堂を見学しておきたかったから、そっちで時間を潰してます」

「……すまないが、そうしてくれるか。道もここから右へ真っ直ぐ行けば着くし、迷うこともないだろう」

「はい」

「……………」

「では、用件が済んだら迎えにいく。なるべく手短に済ませるよ」

「いえ、大丈夫ですから。ほら、キリヤも行かないと」

「ん……ああ」

それだけ言って、三人はその場で一度別れる。とりあえずハクア

の背中が見えなくなるまで二人は城門から見送って、それから巨大な門の下をくぐって城内の広い中庭へと足を踏み入れた。

中庭には人影は少なかった。当然だが、誰でも気軽に城の中へと足を踏み入れられるわけではない。先ほど城門の兵士がそうだったように、中へ入るには手順を踏んで許可を取る必要がある。基本的に騎士団上層部の人間や直接城に仕える者を除き、厳しく取り締まるのが通例だ。戦争が終わってだいぶ時間は経つが、今なお王族の命を狙う不穏な動きを見せる輩は後を絶たない。そのための最低限の用心と考えればそれも頷けるだろう。

アクセルとキリヤ、二人は城門の兵士の言葉に従って中庭の上を歩く。一口に中庭と言っても、これだけ巨大な城の中にある庭が並大抵の広さであるはずがない。目的の人物であるグレンを探すのに、もこれは一苦労しそうだ。

「……………なあ、アクセル」

「何だ？」

そんな道の上、一歩先を歩くアクセルの背中にキリヤが声をかけると、アクセルは振り返らず立ち止まらずに背中越しに聞き返す。

「ハクアのことだけだ」

「……………安心しろ。確かに絶対安全とは言えないが、仮にもここは王都だ。ジェリオの街よりも人が多い分、巡回してる騎士の数も多い。この街の中で悪事を働こうなんてやつはそうそういやしないさ」

「そうじゃない」

「……………そうじゃない、とは？」

「一緒に連れてこれたんじゃないか？ 同じギルドのメンバーだって話せば、ハクアだって一緒に城の中に入れたはずだろ？」

「……………どうだろうな」

「はぐらかすなよ。普段のアクセルなら、例え王都でも身の安全を第一に考えて一緒に行動するべきだって言うはずだ」

「……………」

「……何か、理由でもあるのかよ？」

「……すぐに分かる」

それだけ答えて、アクセルはやはり一度も振り返らずに歩き続ける。その背中が、普段と比べて少しだけ小さく見えたのは気のせい
か。

やがて、二人は目的の人物の姿を発見した。遠めでも分かるくらいの巨体、見ているだけで疲れそうになるくらいの重量感溢れる甲冑に身を包んだ大男。

「おお、来たか」

やってくる二人の姿に気付き、男は体の向きを変える。百九十センチに届くかという大きな背丈。全身を包み込む銀の甲冑。生身の部分なんて首から上くらいしか見当たらず、その髪の色はまるで鮮血のように真っ赤に染まって逆立っていた。よく見れば、額には大きな十字傷のような跡がある。

「お待たせしました、グレン殿」

「何、呼び出したのはこちらの方だからな。遠路はるばるよく来てくれた。元気そうで何よりだ」

「グレン殿こそ。むしろ、以前会ったときよりも若々しく見えるくらいです」

「ははは。その歳で世辞など嗜むな。俺はまだまだ現役のつもりなのだからな」

「いえ、そういう意味では」

「分かっている。それより」

「……はい」

二人の会話が中断し、その視線がキリヤに揃う。視線を受け、キリヤはとりあえず深く頭を下げた。目の前にいるのは騎士団の中でも最高クラスの位置に立つ騎士団長だ。素直に敬意を込めてお辞儀をする。

「ふむ。名は何と言う?」

「キリヤです」

「キリヤか。アクセルからの報告は受けている。先日の人売りの一件、ご苦労だった」

「あ、ありがとうございます」

「アクセル。もう一度聞く。お前の報告に、一切の偽りはないのかな?」

「はい。全て事実です」

「……分かった」

グレンは一度小さく溜め息をつく、再びキリヤへと向き直る。心なしか、その視線がわずかに鋭くなっているように見えて、キリヤはわずかに気圧された。

「キリヤよ。俺はリリアネス騎士団、騎士団長の名を戴く者だ。名はグレン・カルディオ。ぶしつけだが、この場で騎士団長の名に置いて先日の働きに対して決を下す」

「……決?」

一瞬だけ静まり返った中庭に、グレンの言葉が突き刺さる。

「…………キリヤよ。今この時をもって、お前から騎士見習いの称号を剥奪する」

第十話 揺れる王都

「称号の、剥奪……？」

目の前に突きつけられた言葉を、キリヤは無意識のうちに反芻する。

「いかにも」

対して、たった今そう告げたばかりのグレンは同じ口調で付け加えた。

「先日の一件、結果だけ見ればお前は十分に活躍しただろう。発の実践任務にしては十分に上出来だ。だが、規則は規則だ。お前がアクセルとの約束を破り、単身で危険な行動に出たこともまた事実。結果はどうあれ、個人の勝手な行動は戦場において部隊そのものを危険に晒す行為に等しい。よって、俺はそれ相応の罰を与えねばならん」

「……………」

グレンの真横でその話を聞くアクセルの表情はどこか苦しそうに見えた。不本意ではあると、その顔が物語っていた。だが、アクセルもまた騎士団に所属する騎士の一人だ。規則には従う必要がある。例えそれが、同じギルドの仲間で弟のような存在であったとしてもだ。

「……だから、ハクアをつれてこなかったのか。そういうことか、アクセル」

「……そうだ。ハクアがこの場に居合わせれば、あの子はきっとお前の味方になるだろう。事情を説明し、グレン殿の決定を覆そうとしただろう。全ては私を助けるための、仕方のないことだった、とな」

「……分かった。その後は大体、俺も予想できる」

きっとハクアは、グレンに対しても一步も引かずに食らい付くだろう。決定が翻るまで、てこでもこの場を動こうとしないかもしれない。それ以上に、ハクアは自分を責め続けるだろう。全ての原因は自分にあるとか言い出して、涙を零し始める姿さえ容易に想像ができる。それは、嫌だ。どれだけ自分のことを思ってくれての行動だとしても、そんな光景は見たくない。

「……グレンさん。称号を剥奪されたらどうなるんですか？」

「見習いの称号を再び求めるというのなら、再度試験を受けてもらうことになる。が、再試験を受けるには剥奪されたその日から百日が経過してから出ないと受験資格は戻らない」

「はぁ……。これから昇級試験ってときに、また一からやり直してわけか……」

「そういうことだ。諦めるか？」

「いえ、全然」

二つ返事でキリヤは答えた。たった今称号を剥奪されてただの一般人に成り下がったというのに、その目はすでに前を向いている。

「百日か。ま、基礎をやり直すにはちょうどいいくらいの時間かな。それが終わったら、また試験を受けられるんですね？」

「む？ ああ、うむ……お前、不服ではないのか？」

「何がですか？」

これまた二つ返事で聞き返すキリヤに、グレンは目を丸くする。そして一拍の間を置いて、その巨体に似つかわしい豪快な笑い声が響く。

「ふ、ははは。がはははは！ いや、これは参ったな。不本意な罰を与えた俺の方が笑われるとは、いやはや……全く持って気分がいい」

「グレン殿……」

「ああ、すまんアクセル。一番不本意であったのは他でもないお前自身だったな。だが、見ての通りだ。この分だと、お前のは杞憂で

あつたのではないか？」

「……どうやら、そのようです。まあ、心のどこかでこうなることを分かっていた自分も確かにあつたのですがね」

「……二人とも、揃って俺のこと試してたんだな？」

「そうむくれるな。試すような物言いになってしまったことは詫びよう。だがな、お前の本当の気持ちを知りたかったのだ。アクセルの言葉や手紙の内容ではなく、本人の言葉そのものでな。だが、はつきり言って安心したぞ」

そこまで言うときグレンは一度言葉を区切り、その手をキリヤの肩へと軽く置く。大きな手だった。頭をそのまま驚掴みにできるくらいはある。無骨で、傷跡の多い手だった。きっと今までも、沢山の戦いの中に身をおいて、剣を振るってきたのだろう。そしてこれからも、必要とあらば戦いの中で剣を振るうのだろう。騎士団長、グレン・カルディオン。その手は大きく、温かかった。

「キリヤよ、騎士になれ。お前のようなやつは、いつの時代も必ず必要になる。そしていつか、お前のようなやつが先頭を切って道を切り開き、新たな時代を作っていくときが来る。そのときが来るまでは、俺達の背中を追い続ける。だが、いつかその新しい時代が切り開かれたそのときは、次の時代の人々にお前の背中を見せてやれ」

それだけ言うと、グレンはキリヤの肩から手を離し、背中を翻した。大きな背中だ。きっと今も、多くの騎士達がこの背中を見て生きていくのだろう。そしてこれから、生きていくのだろう。ここから繋がる、新しい時代へと。

「お前が騎士になるその日を、楽しみにしているぞ」

最後にそれだけ言い残し、グレンはその場を去っていった。その背中が見えなくなるまで、キリヤとアクセルはずっと目で追いつづけていた。

「すごい人だろう」

「……ああ」

「俺が騎士の称号を得た日も、グレン殿に今と同じことを言われたよ」

「アクセルも？」

「ああ。多分、俺達だけじゃない。今いるおおくの騎士達が、あの人に同じ言葉をかけられている。あの人の言葉は嘘がなく真っ直ぐで、非常に分かりやすい。だからだろうな。やってやるという、そんな気持ちにさせられるんだ。たとえ戦場で敵の軍勢を前に劣勢を強いられても……あの人の言葉一つで、士気が何倍にも膨れ上がるような……不思議な人だよ、本当に」

「……そうだな。アクセルの言うことも、何となく分かる気がする」
「そうか」

「何となく」

「で、実際はどうなんだ？」

「どうもこうもないさ。意地でも騎士になってやる。そのときにまた、改めて挨拶に来るよ」

「……がんばれよ」

「何だよ、気持ち悪いな。言われなくなっちゃってやるさ。百日なんて、きつとあつという間だからな」

「ああ、そうだな」

二人は再び城門を抜け市街地へと戻る。とりあえず大聖堂にいるハクアと合流しなくてはならない。

「思ったより早く済んだな。さて、この後どうするか」

「……アクセル、帰りは陸路に」

「船だ。が、次の船が来るまでしばらく時間がある。ハクアと合流して、少し街の見物でもしていくか」

「やっぱ船か、船なのか……つと。そうそう、これをメルフィナから預かってたんだけど」

「何だ？」

キリヤはポケットの中から、今朝の出発の際にこっそりと手渡された紙を取り出す。折りたたまれたそれを広げてみると、そこには何十種類にもおよぶ食料の名前が書き連ねられていた。せっかく王都まで出向くのだから、その市場で珍しい食材を買い漁ってこいという意図はすぐに読み取れた。しかし

「……何だ、この量は」

「……ふざけてやがる。こんな量、俺とアクセルだけじゃ持ち切れないぞ」

荷物持ちの人数にハクアを数えるわけにはいかない。となると二人がかりで荷物を運ぶわけになるのだが、とてもじゃないが持ち切れる量ではない。というか、これは一体何人分の食料になるのだろうか。そこまで考えたところで、どうせメルフィネのことだからここにある食材を一日で食い散らかすくらいの自信はあるのだろうと勝手に納得してしまった。それはそれで恐ろしいことだが、買い物忘れて八つ当たりを浴びるのもそれはそれで恐ろしい。

「……まあいい。いくつかはすでに売り切れていたことにしよう。半分も買い込めば十分だろう。というか、そこまで余分な持ち合わせなんてないしな」

「金も渡さずにこんだけ買ってこいとか、何なんだあいつは……」

言いたいことは山ほどあるが、とりあえずそれは置いておく。大聖堂へ向かう道の途中、すでに付かれきった様子の二人の足取りはどこか重い。

聖リリアネス大聖堂。

大陸で最大の規模を誇る聖堂で、日を問わずに各地からの巡礼者や参拝客で賑わう場所だ。王都の観光名所の一つとしても有名であり、希望者がいれば聖堂所属の聖職者が歴史や文化などに関して説

明もしてくれる。内部には聖堂の他にも多くの蔵書を保管、管理する大図書館があり、これは関係者の間ではライブラリと呼ばれている。多くの書物は一般の人間でも手に取ることはできるが、図書館の利用には聖堂関係者の許可が必要だ。また、一部の書物は特別な許可が下りない限り開示できない決まりとなっている。

キリヤとアクセルの二人が大聖堂に到着すると、すぐにハクアの姿を見つけることができた。ハクアは聖堂前の並んだベンチの一つに腰掛け、何やら本のようなものに目を通している。

「……あ、キリヤ！ アクセルさん！」

二人の姿に気が付いたのか、ハクアは読みかけの本を閉じ立ち上がる。

「遅くなってすまない」

「何読んでるんだ？」

「あ、これ？ 大聖堂の人にもらった、世界の成り立ちとか歴史について書かれてる本だよ」

要するに布教用の本ということだろうか。まあ、大聖堂にしろ修道院にしろ教会にしろ、その運営をまかなう資金の大半は信者からの献金という形でまかなわれているのだから、そちら側としては一人でも多く信者を増やしたいという気持ちは分かる気がする。

「用事はもういいんですか？」

「ああ、無事に終わったよ」

「何のお話だったんですか？」

「……ま、色々とな」

わざわざアクセルが気を使ってくれたのに、ここで馬鹿正直に本当のことを言うこともない。キリヤは適当に茶を濁し、その話題から遠ざかることにする。

「それより、帰りの船まで時間があるからもう少し王都の中を見ていかないか？」

「いいんですか？」

「あまり長々とはいかないがね。ハクアはどこか、見ておきたい場所とかはあるか？」

「えっと……すいません。何がどこにあるかもさっぱりなので」

「分かった。じゃあ、来るときに歩いた通りとは別の通りを歩いて、色々見て廻るとしよう」

三人は揃って歩き出す。大聖堂前の広場は大々的に開放されており、先ほどのハクアのように備え付けられたベンチなどでこそを休める人の姿も少なくない。それ以上に参拝客が多いので、自然と雑踏ができてしまう。が、混雑というほどでもないので歩くのに不自由はしない。人の間を抜け、三人は表通りから一つ外れた通りを歩き始めた。直後に

——数人分の悲鳴と、爆発音が鳴り響いた。

「きゃあああっ！」

「おい、何があった!？」

「見て! 煙が上がってるわ！」

「広場の石像が壊れたらしいぞ」

「爆弾か!？」

などなど、一瞬の静寂の後にそんな声が口々に聞こえたかと思えば、広場はすぐに騒がしくなった。慌てふためく者、驚きのあまり腰を抜かしてしまう者、野次馬として群がる者など様々だ。

「キリヤ、ハクアを連れてここを離れていろ」

「お、おい! アクセル！」

「アクセルさん!？」

それだけ言い残し、アクセルは真っ先に大聖堂へと走っていった。

「くそ! 俺達も行くぞ、ハクア！」

「う、うん！」

結局残された二人も同じように走り出していた。目の前では灰色の煙がもうもうと立ち上っている。空の青さとは不釣り合いなその色

が、何かしらの不安を予感させているようだった。

第十一話 盗人

聖堂前の広場は野次馬で溢れ返っていた。爆発音を聞いてすぐに走り出したアクセルだったが、思った以上に多い野次馬に思うように前に進めず、なかなか現場へと駆けつけることができないでいた。「すまない！ 通してくれ！」

どうにかこうにか広場の前までやってくると、まず目に飛び込んできたのは粉々に砕け散った石像の姿だった。土台の部分だけは無事であるが、それ以外のところは吹き飛ばされている。もとは聖母の石像だったはずだが、これでは目も当てられない。

「怪我人はいませんか？」

「あ……は、はい。大丈夫のようです。飛散した欠片でかすり傷を負った者が数名いますが、それ以外は……」

その場にいたシスターの一人に声をかけるとそんな答えが返ってきた。不幸中の幸いか、爆発による死者や大怪我をした者はいないようだ。アクセルはわずかに胸を撫で下ろす。そのときだ。

「道を開けてくれ！ 騎士団の調査隊だ！」

雑踏の向こう側からそんな声が聞こえてきた。するとすぐに人ごみの間に道が割れ、その向こうから数名の騎士と共にグレンが姿を現した。

「グレン殿」

「アクセル？ お前、どうしてこんなところにいる？」

「連れと待ち合わせをしていました。無事に合流し、この場を去ろうと思った矢先のことです。爆音のようなものが響き、どうやらこの石像が破壊されたようです」

「ふむ……」

そこで一度グレンは視線をはずし、すでに木っ端微塵になってし

まった無残な石像へと目を移す。その周囲には石像のものであろう破片があちこちに飛び散り、大小無数の石ころが転がっていた。

「……怪我人は？」

「死者や重傷者はいないようです。それだけ不幸中の幸いでした
が……」

「……そうか。確かにそれは幸いではあったが、さて……」

まだ何か言いたそうなグレンではあったが、とりあえずこの場は言葉を引っ込めておくことにした。それよりもまずはやる必要がある。

「お前達は怪我人を運びしだい、騎士団本部に通達しろ。不穏な輩が王都の中に紛れ込んでいる可能性がある。厳重に警戒し、巡回を増やすようとな。不審者を見つけたらすぐに俺まで知らせろ」

「はっ！」

言われ、数名の騎士達が急ぎ足で騎士団本部のある方へと走り去っていく。その背中を見送ったところで、グレンは再び何か言いたそうな表情に戻る。

「アクセル！」

「アクセルさん！」

その思考を打ち切らせたのは、キリヤとハクアの声だった。人ごみの向こうから二人が駆け寄ってきているのを見て、アクセルはわずかに驚く。

「二人とも、すぐにこの場を離れろと言っただろう！？」

「何言ってるんだよ。後先考えずにいきなり走り出したのはアクセルの方だろ」

「アクセルさん、一体何があったんですか？ さっきの、爆発の音みたいなのは……」

「案ずるな。お前達が心配する必要はない」

「グレン、さん？」

「え……キリヤ、知ってる人？」

「ああ。騎士団長のグレンさん。さっきまで俺とアクセルが会った人だよ」

「そうか、二人の連れとかこの子の何か。俺はグレン。聞いての通り、騎士団長を務めている者だ」

「は、はじめまして。私、ハクアです」

「丁寧な自己紹介のところ悪いが、話を続けさせてもらおう。この件に関しては騎士団が調査を開始する。間もなくこの場は騎士団の管轄に入り、一般人の出入は厳しき制限させてもらうことになる。そうなる前に、お前達は王都を離れた方がいいだろう」

「けど……」

「キリヤもハクアも、グレン殿の言うとおりにするんだ」

「でも、アクセルさんは？」

「こんなことがあったんだ。俺とて騎士団の一員として、真相を探る義務がある。残念だが一緒に帰ることはできそうにないな。船の時間になったら、一足先に二人でジェリオの街に戻ってくれ。それと、ギルドの皆に伝えてほしい。急用ができたから、数日は王都に滞在するとな」

「だったら、俺も」

言いかけて、キリヤは思い出す。ほんの少し前に、自らの騎士見習いの称号は剥奪されているということに。今の自分はここに残ってアクセルを手伝うことはできないということをする。

「く、そ……！」

「……キリヤ、ハクアを頼む」

「……分かった。アクセルも、あんま無理すんなよ」

「ああ、分かっている」

「行こう、ハクア」

「あ、待ってよキリヤ」

先に歩き出すキリヤを追いかけ、ハクアもそれに続く。二人のその背中が小さくなるまで、アクセルはその場を動かずに見送った。

「思ったよりは聞き分けはいいようだな。キリヤのことだ、食いついてでもこの場に残ると言い張ると思っていたぞ」

「普段のあいつなら、そうしたでしょう。グレン殿のおかげかもしれません」

「俺のいる手前、無茶をできなかったと？」

「それも少しはあるかもしれませんが……それ以上に、先ほどのグレン殿との会話が、あいつを踏み止まらせたんだと思います。自分の我侭一つで、周りを巻き込む可能性があるということを、あいつは知ったんだと思います」

「ふむ。だが、どうやらそれだけではないようだがな」

「……あいつにも、一つくらいあった方がいいんです。守りたいと思うものが。心の底から大切だと思えるくらいの何かが、一つくらいはあった方が」

「なるほどな。そういうお前はどうかんだ、アクセル？」

「私、ですか？　そうですね……」

少しだけ考えて、アクセルは口を開く。まるで、考える必要なんてなかったかのように。

「沢山ありますね。少なくとも、この両腕には抱えきれないくらいには」

「そうか。奇遇だな、俺もだ」

それだけ言って、グレンはどこか満足そうに笑った。だが、その笑みも一瞬だ。表情はすぐに厳しさに戻り、これからはすべきことを真っ直ぐに見据えた目つきへと戻る。だが、今はまだその時間じゃない。動くのは、日が暮れて夜があたり満ちた頃からだ。

聖リリアネス大聖堂の奥には、地下に通じる隠し通路がある。この存在を知っているのは王族の中でもごく一部で、それを除けば大聖堂の最高責任者と一部の限られた者達だけだ。どうしてそんなも

のが大聖堂の中にあるかと聞かれれば、答えは実に簡単だ。隠す必要のあるものが、その場所には眠っているからに他ならない。しかもそれは、個人の秘密程度のものではない。一つの国が、国家が丸となってまでひたむきに隠し続けなければならない、それだけの理由があるからだ。それがどんなものであるにしても、価値のないものであるはずがない。盗む理由としてはそれだけで十分だった。

かつんかつんと足音がこだまする。大聖堂の地下、隠し通路の中は下りの螺旋階段になっていた。深く深く、地の底の底まで繋がっているかのような石段を、一人の人影が進んでいく。その手にはラントンの明かりが握られており、身に着けた真っ黒なフードとマントが壁の影の中でゆったりと揺れている。

「……………」

顔はフードに隠れて見えず、体格もマントのせいではつきりしない。男なのか女なのか、子供なのか大人なのか、それさえもこの暗闇の中では区別できなかった。

やがて、長かった階段が終わる。その人物の前に現れたのは、古い石造りの扉だった。表面には何やら文字が刻まれているようだが、ところどころが崩れてしまっていて読むことができない。それ以前に使われている文字が古い時代のもので、そっち方面の知識がない人物にとっては何が何だかさっぱりだ。

が、構わずその人物は扉を押した。すると、ずらずと地面を引きずりながらも、扉はゆっくりと押し開けられていく。体が通り抜けられるだけの隙間を確保すると、その人物は静かに中へと歩を進めていく。当然のように暗闇が広がっているはずだったが、一ヶ所だけ他とは違う場所があった。そこがこの地下の部屋のどの部分に当たるのかは分らない。が、確かにその一点だけが光っていた。青白い、神秘的な光を放って揺らめいていた。

「……………見つけた。これが……………」

その人物は小声で呟く。若い声だった。だが、それだけではまだ男とも女とも判断しがたい。構わずその人物は光の場所へと向かう。「……間違いない。これさえあれば……」

目的のものを目の前にして、その人物はわずかに笑みを浮かべる。闇の中ではあるが、青白い光を放つその前で、口元は確かに微笑みの形を作っていた。だからだろう。今の今まで張り巡らせていた、警戒の糸がわずかに緩んだ。気付いた瞬間には、すでに遅かった。「っ!？」

その人物は背後を振り返る。いつのまにか光源が増えていた。それも、一つや二つではない。松明の明かりは後から後から増え、唯一の入り口だった石の扉の前は完全に塞がれてしまった。

「騎士団か……!」

忌々しそうな声で呟く。対して、入り口を完全に封鎖した側は静かに告げる。

「まんまとかかったな。まさに袋のねずみというやつだが、どうする？ まだ抵抗は残されているわけだが」

そこまで言って、鞘の中から剣が抜かれる音が響いた。松明の明かりに照らされた中、白銀の大剣がよりいっそう輝きを増して赤く映えた。

「無駄な抵抗と知ってなお抗うというのなら、止めはせん。相手になるぞ」

グレンは真っ直ぐに剣を構えてそう告げた。逃がしはしないと、その表情が物語っている。対して、黒い衣装に身をまとった人物はゆっくりと振り返る。そして、静かにそのフードを取り払った。グレンの表情が、わずかに固まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9032x/>

GUILD -還るべき場所-

2011年11月4日02時02分発行